

---

# Training Box

日奈久 夕花子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Training Box

### 【Z-IPアード】

Z0356Z

### 【作者名】

日奈久 夕花子

### 【あらすじ】

ファンタジー＆恋愛の掌編小説並びに短編小説置き場。ブログにて掲載した作品をこちらに整理しました。お題内は基本同一世界。ただしつながりはある場合とない場合がござります。リハビリとしての習作作品となりますので、ご了承くださいませ。また、5題という章タイトルから想像する中身と異なる場合もござりますので、ご注意ください。各話のタイトルには沿つよつにしております。が、努力がからまわることもありますのでご了承ください。12月で完結します。ありがとうございました。（サイト名：「確かに恋

だつた様 http://have-a-chew.jp/ よりお題をお借りしております)

## 1・賭博好きなお姫さま

フィノルディアの第一王女は、それはそれは美しい。 いまだ成人前ゆえに、結うことのないその髪は日に透けて輝き、ほつそりとした面にいたずらな日が若草の色に輝いている。

フィノルディアの第一王女は、それはそれは愛されている。

王と王妃はもちろんのこと、側妃たちの評判も悪くなく、兄弟仲も悪くない。

むしろ、両親たる王と王妃と、側妃と子である兄弟たちには溺愛されているといつてもいい。

幸せで素晴らしい、フィノルディアの第一王女。

だけど。

だけどひとつだけ。

彼女は秘密を持っている。

この国の、王女の最大の秘密。

「」の前の試合の結果は、どうなっています?」

傍らに控える無一の侍女に、王女の柔らかな声がかかる。

「ええ、下馬評通り……と申したいところですが、大番狂わせがでましたわ」

「まあ！ では、今度も、わたくしの勝ちね」

手に持った扇で口元を隠しながら、じりじりと鈴を転がすような声で笑う王女。

「……さすがですわ。姫様」

うつとりと微笑む、侍女の姿。

フイノルティアの第一王女は、とても美しく愛されている。

けれど、両親も皆も、誰も知らない秘密。

彼女の個人資産が、実は途方もないものになっている、ということ。

彼女が、とても賭博好きだ、ということ。

彼女の特技は変装で、時折城下に降りては少々いかがわしい場所で、賭け事を繰り返している、とか。

その付近ではさつ気に姉御と呼ばれている、とか。

誰もだれも、知らない秘密。

「……さあ、この国での最後で最大の賭けが、もつすぐはじまるわ」

成人の日まであと少し。

間もなく決定する嫁ぎ先を思つて、扇の陰でニヤリとどこか妖艶な笑みをこぼす姫なのだった。

fin

## 2・元騎士様、求職中

品行方正にして質実剛健、誠実なるものであれ。

そんなもののくそつくらえ、とばかりに投げ出して、自由に生きてやるぜ！ と、騎士をやめたのはもうゞのくらに前になんとか。

「……若かつた、なー」

断られた店先、深くため息を漏らしながら、男は頃垂れた。

最初はよかつた。それなりに蓄えもあつたし、自由になつた身が嬉しいばかりで。

飲んで遊んで、その日暮らしの日々。

軽いけがで、まあ、そりや、頑張れば前の通りに働けないこともなかつただろうが、これ幸いと騎士をやめて。

心配する両親には、大丈夫です、またやり直します、なんて、いい顔みせて。

しかし、時間がたつにつれて、両親は渋い顔に。

ためた金使い果たしたあたりから、仕事もしないで遊び歩く男に、周囲は厳しくなってきた。

世の中、金、かー？ 権力かー？

貧乏子爵家に、男を遊び惚けさせる余裕はなかつたようだ。

「あー……仕事おちてねえかなあ」

いつそ傭兵にでもと思つたが、けがのあと眞面目に鍛錬しなかつたために変な癖がついてしまつた。

ならば力仕事か、と、思つたが、急げた体は重くすぐに息が切れる。

若かつたなあ、と、しみじみ空をみあげてつぶやいて。

のそのそと、宿へと戻る。

実家を追い出されて、日雇いの仕事で乗り切つて。

……」のまま、「ひりぶれて、俺は昔騎士だつたんだぜー、なんて、よつぱらひつづくやくよつこなるんだらうか。

それがあまりにありあつと想像できて、男はぶるつと身體いをするのだった。

### 3・王子様はノイローゼ

「…………僕はなぜここにいるんだろう」

王城の豪奢な執務室で、書類を片手に、一人の少年がぼんやりと窓の外を眺めながら呟いた。

少年は身なりから、身分が高いことが察せられる。それもそのはず、この国の王太子として若干15歳ながらも執務の一部を担っていた。

「ああ、鳥だ……空を飛べたら自由になれるかなあ……あはははは

しかし、霸気がない。茫洋と窓の外を眺め、まるで棒読みでつぶやく。

「…………執務中ですよ」

傍らに控えていた侍従が、遠慮がちに声をかける。が、聞こえないのか振り向きもしない。

「ああ……遠くにいきたいなあ。海の向こうの新大陸にでもいきたい。もう、もういいじゃないか、もうさ、やりたいっていうなら、ぜーんぶ、譲るからや、もう、ほつとこてくれよってね」

無表情のまま、窓の外を眺めつつ、つぶやき続ける少年。

と。

がしゃーんと窓が割れて、黒ずくめの装束の男が飛び込んでいた。

「お命頂戴仕のー。」

「殿下ー。」

そのまま襲い掛かる男に、侍従が王子を抱き取り飛び出し、控えていた騎士たちも臨戦態勢となる。

きん！ と、男の攻撃がはじかれ、緊迫した空氣の中、騎士と男が切り結ぶ。

「あ……」

ぽつり、と。そんな中王子が声を漏らす。

「あああああもつ！ そんなに俺が王太子やつてんのいやなんだつたら、やめてやる！ やめてやるよひきじょーーーー！」

ばん！ と、机をひっくり返しそうな勢いで、王子が叫ぶ。

「で、殿下、何を！ー。」

「だつてそうだらうよー。口クに仕事を手伝うわけでもないのに王になりたいとかいながら俺を狙つてくる弟どもも、口クに政治のあれこれもなんもわからん上に浪費だけは激しい弟どもの母親どもも、もうもう、勝手にしろってんだ！ 好きに勝手にやればいい、俺はもう知らん。もうもう、もう知らん！ 父上が大変だからと手伝つてはいたが、その父上だって馬鹿な子ほどかわいいんだかなんだからしらんが弟どもをかばいやがるし、そのうえその馬鹿な母親た

ちも、惚れてんだがなんだかしらんが放置しやがる。この国、ぎりぎりだぞ？ 経済状態ぎりぎりなんだぞ？ それをおつまえ、仕事もしねーで金ばっか使っておいて、王位継承の儀が近いからってここまでざかざか暗殺者やら毒やら仕込まれたんじゃ、俺やつてられねえつて！ 国のため、民のためつて思つてここまでやつてきたけど、もう限界。もう無理。もう勘弁。生まれた時から命狙われてたけど、10超えてからは仕事手伝いながら頑張つてきたけど、もー、限界。俺、出でぐ。絶対この国でてつてやるー！」

一気にそれだけ告げると、机の上の書類をなぎ倒し、部屋から出していく。

「つ、で、殿下ああ？！」

足音高くその場を去る王子の姿に、室内は一瞬茫然としたが、あわてて騎士の一部と侍従が後を追つ。

残されたのは騎士と相対していた暗殺者のみ。

気まずい沈黙が続く。

そつと視線を逸らした暗殺者は、静かに剣を引くと、頭をかいた。

「まあ、なんだ……うん、なんか悪かったな」

なんとも言ひ難い暗殺者の男の言葉に、騎士も剣を引きつつ、なんともいえない表情を返す。

「……まあ、まだ殿下も若いからな。しかし、あそこまでとは……」

殿下、ご乱心。

はたしてこの国がこれからどうなっていくのか、不安に襲われる騎士と暗殺者だった。

fin

#### 4・民間資格の魔法使い

小さじこじら、約束したの。

きつと、きつと迎えに来るつて。

「つーふあ、まつててね。きつとつよくなつて、むかえにいくるから

遠く離れた処に引つ越しにいく彼を、見送るしかなかつたあの頃。  
いつかきつと、また会えるつて。むかえに来てくれるつて、信じて  
た。

けれど。

「……まつててられなかつたので、来ちゃいましたっ」

てへ、と笑いながら首をかしげて見せれば、彼は茫然と、ずれたメ  
ガネを元に戻して。

「ど、どちらをまですか？」

「ど、どちらがゆえに、彼は私のことを忘れたみたい  
です。」

「ひ、ひどい……っ、約束を忘れるなんてっ。むかえに来てくれるつていったのに！ 強い魔法使いになつて、そしてむかえにきてくれるつて！ 王都で頑張つて宫廷魔術師してるつてきいたから、私も魔法勉強しながらまつてたのに！ なかなか来てくれないから、じこまでいたのに！ ひどいいい」

「え、ええええ？ ええと、ちこちこじる？ え、あ、もしかして、リーフアですか？ となりに住んでいた、いじめっ子の」

「え？」

「え？」

「い、いじめてないよ？ 酷い！」

「いやだつて、ほり、嫌がるのに虫を押し付けたり、嫌いだつていつてのヒココルの実を食べさせたりしたじゃないですか」

「え、泣いて喜んでたんじゃ……？」

「そんなわけないでしょっ！」

「がーん、ショック……」

「いや、どうしてそこでショック受けられるのかがわかりませんが……まあ、お久しぶりです。綺麗になりましたねえ」

「う、うわあ、王都にいつてあなたつてば、女たらしこなつたの？ なつたの？」

「ちよ、社交辞令をそういう風にとられても

「社交辞令って… 最低」

「ああああ、としあえず、落ち着きましょ。」  
「遠かつたでしょ」「たままでさじやつ

不思議そうな彼に、胸を張つて答えますと。

「魔法の勉強をして、資格をとったの。で、さっそく王都まで飛んでみました」

きやるん と、首から下げていた資格証を見せれば、驚いたよ。彼は瞬いて、それから食い入るように資格証を見始めます。いやん、胸元を凝視だわ。

「転移魔法ですか……？」しかもその資格証、国の発行する魔術師資格とは違うよ。なに、『地方連合協議会認定魔術師』？ なんです、これ、地方団体ですか？

ふるふると首を振ります。

「なんか、民間の有志の方々が立ち上げた団体でー、なんと一日5分の練習で魔法が使えちゃう！ つていう、通信教育だよー。遠見の水晶で先生のチェックもばっかり！ これで私も魔法使いになれたー」

「……え。なんですか、それ。人が魔法学園に必死で勉強して合格し、さらに学校で鍛えられ、やつとの思いで宫廷魔術師になつて、そこまで来て転移魔法が使えるようになつたというのに」

「え。 1か月くらいで使えるよつになつたよ、この講座だと」

がっくりと頃垂れる彼のそばによつて、肩をぽんぽん。

「まあまあ。 とりあえず、今夜とめてね？」

はつと振り返つた彼に、につこつ。

せつかく、資格まで取つて会いにきたんだもの。

もつ逃がさないんだからつ。

彼の運命を知る者は、誰もいない。

余談。

かの民間資格、実は立ち上げたも現在講師をしているのも、実力はあれども人に仕えるのメンドイとばかりに引きこもつたり自由に生きてたりした超優秀な魔術師たちが、遊び半分で立ち上げたものだつたとさ。

fin

## 5・召使いは時給制

「それでは主<sup>おの</sup>さま、今日は<sup>おひ</sup>いじで失礼いたします」

就業時間を終えて、ふわりとお仕着せのメイド服のスカートを揺らしながら礼をする。

深く腰を折りながらも、バランスは崩<sup>くず</sup>さない。これって匠の技だよね。

ゆつくりとそのまま体を元に戻せば、部屋の中、中央に置かれた力<sup>あ</sup>ウチにしじけなく腰かけた、風呂上りしき艶やかな濡れ髪の主様<sup>おの</sup>。先ほど届けたワインを片手に、じつと<sup>じつ</sup>ひらき<sup>ひらき</sup>覽<sup>らん</sup>になつておられます。

あらやだ、色氣がただもれでしてよ？

「もう帰るのか。じうだ、一杯飲んでいいかい

まあ素敵な<sup>い</sup>提案。主様が飲まれるワイン、とてもいいものが多いのですよね。こちらに来てから、私<sup>わ</sup>たらアルコールに強くなつたみたいで。おいしそうにお酒をおいしく飲めるようになつたのよね。じゆるり、と内心はよだれぬぐいつつも、必殺メイドの微笑み！

「とんでもない」とド<sup>ド</sup>き<sup>き</sup>ります。一介の侍女風情がそのよつた。どつかお許しくださ<sup>い</sup>ませ

そもそも告げてみたな<sup>ら</sup>ば、じこがま<sup>ま</sup>すにものでも召し上がつたよ<sup>う</sup>なお顔の主様。まあ、失礼な。

「今更何を言ひ。ならばなんだ、仕事でなければいいのか？」

「いえ、お断りいたします。仕事としてでしたら、お付き合こそさせていただきますけれど」

「……どうだ。まあいい、座れ」

「失礼いたします」

身の上なしさ丁寧に。ゆうべつと邪魔にならなによつて、カウチのそばへ。

ぽんぽん、つて、そこお隣ではありますか？ 座れど？ そこは座れど。

にやにやしないでくださいな、主様。口おやじくせこです。いいませんけど。

しうがないので腰をおろし。勧められるままに一杯一杯。あらあいしい。

窓の外は綺麗な月夜。これはいい月見ワイン。なんかゴロが悪いですね。

静かにかけられる声に、静かにお応えして。程よく飲み終わつたところで、そろそろお開き。

「しかし……かなり飲んだうつに、崩れないな、お前」

どこか悔しそうな主様。そこそこお酒がまわつたのか、色づく頬に濡れた脣、あら、田まで潤んで。これはまた、美形なだけに田の保養ですね。

「ええ、それが取柄でいります。では、今日はこれにて

礼を取つて、からのティキヤンタビグラスを載せたワゴンと共に、退室します。

あ、そうやつ、忘れるといひでした。

出口のところへへんり、振り返つて。

「主様、本日、6時間の残業となります。夜間でもありますので割増しで、請求させていただきますので、よろしくお願ひいたしますね。それでは」

はじけるような笑顔でこつこつ。そう呟くと、今度こそ、静かに礼をしながら部屋を後にしたのでした。

ふつふつふ、お給料、時給制にしてよかったです。

fin

## 1・恋愛「」なら余所でやつなせこ

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかつた。

ただ、彼しか見えなかつた。

それなのに。

「恋愛「」なら余所でやつなせこ」

深いため息と共に、じつとうかうを見つめる田は、呆れたような色で。仕事の手を止めさせてしまった私を、どこか非難していくようだ。

「……だつて」

「でももだつてもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付か合つてる暇はありません」

れひれと歸りなさこ、と、そつ短く告げられて。

そのままパソコンへと再び視線を落とす彼。

「あ……の……」

恐る恐るかけた声すら、もう届かないほど集中していく。

それ以上声をかけることなんか、できなくて。

しばりく、じつと見つめていたけれど、私のほつを見てくれることなんか、なくて。

悲しくて。痛くて。つらくて。

私は、そっと、部屋を後にした。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかつた。

ただ、彼しか見えなかつた。

ただ、彼しかいなかつた。

幼い恋。小さなころに刷り込まれた、あこがれのお兄ちゃんは、今や作家先生。

隣同士、幼馴染。年の差はいかんともしがたいけれど、隣のおばさんのがわいがつてくれたから、彼の仕事場の家事のお手伝いをすると、高校に上がってから許可をもらつた。

本人が知らなかつたなんて。それこそ、私が知らなかつた。

そして。

いつものように、甘えた私を。

仕事中の彼は、取り合ってくれなくて。なんだかさみしくて悔しく

て。仕事から自分に視線を向けてほしくて、つい、言葉がこぼれた。

好きつて。

いつももり、なかつたのに。

言つたつて駄目だつて、わかつてたはずなのに。

返された言葉は、冷たくて。ビニまでも、冷たくて。

気が付けば、ほろほろ、涙がこぼれた。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋かどうかなんて、ビビりでもよかつた。

恋愛じい、だなんて。

「の思ひが、錯覚かどうか、なんて。

彼にだつて、断言される筋合ひ、ないのに。  
遊びだなんて。じいこだなんて。そこまで言われる筋合ひなんて、  
ないのに。

夕暮れの街は、紅に染まる。

じつと、空を睨み付ける。悔しい。悔しい。悔しい。

悲しい。

長く伸びる影を眺めながら、ひとり、静かに泣いた。

## 2・子どもはむづむづの時間です

帰りたくなかつた。

家にまつすぐ、帰りたくなかつた。

だつて、隣は彼の家。お兄ちゃんの家。仕事場にこもることの多い彼が、いつもいるわけじゃないけれど。なんだか、家に帰りたくなかつた。

放課後。

昨日まではクラスメイトと、あちこちに出かけたり、友達の家にお泊り会したりして。

高校まではつと一緒だつた友人たちは、その親とも仲良しだつたりするから、結構気軽に家にちゃんと連絡さえすればお泊り可だつたり、連絡入れればある程度遅くまでオッケー、だつたりして。

夜遊び、つてほどじやないけれど、いつもより帰りが遅くなつた。お母さんは心配してはいたけれど、お兄ちゃんのところから帰つてから変だ、つてわかつてたみたいで、何も聞かないでくれた。お父さんにもなんとかごまかしてくれるみたいで。正直、知られてるつて怖さはあつたけど、でも、ありがたかつた。

さすがに今日は、友達たちも用事があるよう、ひとりぼっち。

今までなら、泊まらないまでも、友達とワイワイ過ごすことで気持ちが紛れるし、そのまま帰宅すればその気持ちを継続できるし、で、なんとかのりきつてきたけど。

ぽつん、と、一人になると、余計なことを考えてしまつ。

嫌われた、という気持ちとか。お兄ちゃんがそんなことで嫌はづない、という願望とか。年が離れた人を、なぜあんなに好きになつたのかな、とか。　もつ、会えないかな、とか。

会えないのか、会いたいのか、会いたくないのか。ぐるぐる回る気持ちは複雑で、なかなかこたえがでてこない。考えすぎて熱が出そう。ため息を漏らしながら、それでもまっすぐ帰る気持ちになつて、公園へ足を向けた。

小学生たちがきやいきやいと遊ぶ公園。昔、私もお兄ちゃんに遊んでもらつたなあ、なんて、思い出す。

よほど小さい時から、私はお兄ちゃんが、彼が好きだつたみたいで、足元がおぼつかない時から見つけると駆け寄るような子供だつたらしい。おぼろげな記憶の中でも、まだ幼児の私が小学校高学年だか中学生だかのお兄ちゃんに駆け寄つては、遊んでもらおうとしている場面が浮かぶ。

……考えたら、すんごい迷惑な子だつたんだね、と。

今更ながらに気が付いて、恥ずかしくて身悶えしてしまつ。

でも。　それでも、好きなんだよな。

なんで、と言われても困るけれど。

そんな風に迷惑な子供だつたし、時々、めんどくさつに困つたように、したけれど。

……遊んでくれたんだよな、子供と。ほつとけよー、なんていう同級生の言葉に、ごめんな、なんてこたえて。つまらなかつたうに、幼稚である私の相手を、しうがないなあなんて顔で笑いながらしてくれて。

甘やかされた。構つてもうつた。

それが当然、と、思つてしまつた。くらべた。

ため息が漏れる。あーあ。自業自得とはいへ、つらいなあ。もう少し、もう少し、大人になつてから、いつつもりだつたのに。好きです、つて。だから頑張つていこまで立派になりました、つて。あーあ。

夕暮れの公園は、日が落ちて、子供の数も減つていく。少し肌寒い気がしてふるり、と、体を震わせたら。

近くで、呆れたよなため息が聞こえた。

ぱつ、とそちらを見れば、彼の姿。え。なんで? どうして? と軽くベンチでチチパニックを起こしていると、少しばかり呆れたような声で、彼が言つ。

「何をしてるんですか。バカ娘。遅くまでこんなところで。夜遊びのつもりですか」

「え……なんで?」

「なんで、も、ないでしょ。連絡してないんじゃないですか? いつもの時間に連絡がないのに帰つてこない、と、おばさん心配してましたよ。まったく……どこにいるのかとおもつたら

言われてみれば、今日はそこまで遅くなるつもりはなかつたので、連絡はしてなかつた。あわてて携帯を取り出して時間を確認。うわ、19時過ぎてる。まだ19時、ともいえるけど、私にしてみれば連

絡なしで帰らない時間ではない。

さらに、着信が複数。確認すれば母と……そして、彼からの、着信。

視線を挙げれば、ふう、と、深くため息をついた彼。よく見れば少し汗ばんでるような気がする。探してくれたの？ 私のこと、うつとおしかったんじゃないの？ それでも、探してくれたんだ。

「「」、めんなさ……」

「全くです。この公園、遅くなると変質者出るって知ってるでしょう。わあ、帰りますよ」

ぐい、と腕をつかまれて、立ち上がる。ぐいぐい。引っ張られるように公園を出る。強い力。でも、転ばないよう気を付けてくれてる。昔からこうだった。強くて強引なようで、優しい。

優しくされたら、諦めきれないよ。

目に涙がたまつていいく。何かの拍子にこぼれそうになりながら、家の前について。

「またたぐ。文筆家なんですかうね、運動なんてできないもやしながら、家

ぼやきながら振り返った彼が、言葉に詰まる。

ああ、涙。隠せなかつた。

ぱりつ、と、一滴。ほほをぬつてこぼれていって。

沈黙。何も言えなくて。ただ一人で立ちぬく。

「うつよ、と、思つてこたら、視界に指が見えた。彼の手。少し  
うつじて、ペンだこのある手。それが、すつと私のほうに伸び  
てきて。泣き声の涙を救つよつて、さつとまほとまじりをながれる  
よつて。」

触れる、熱。

驚いて目を見張れば、はつ、と我に返つたように彼の手が戻される。  
なに。いつたいなに？

「う。子供もまだ寝る時間です。それと帰つなさい」

「うつよ、軽く私の背を押して、家のほうに進ませぬ。  
え、うつじて、そのままふらふらと玄関の前まで進んで。扉  
に手をかけたといつて、振り返つたら。

もう、彼はいなくて。

混乱。困惑。パニック。

20時じや、すがに、寝るにも早い気がするよ、お兄ちゃん。

私は、ちゅうじや玄関の物音うきつて出て立つた母に手をかけられた  
ままで、そこ立ちぬくへじてこた。

### 3・あなたの気持ちよくわかりました

それから。

不思議なもので、会おうとなければ、私と彼はこれっぽっちも接点がなかつた。

ちょうど仕事が詰まつていたのか、実家へ戻つてくることが少ない彼と、日中は学校の私。

今までなら、会いたくて会いたくて、できるだけ口実を設けて隣に行つたり届け物をしたりと、していたけれど。

それをしなくなつた途端、彼と会うことはほとんど、全くと言つていいほど、なくなつた。

ちらり、と見かけることがないわけじゃなかつたけれど、忙しそうな彼に私から声をかけるなんて、できるわけがなかつた。

1週間、2週間。時間が過ぎていいく。

会いたいな、という気持ちが湧き上がる反面、彼の冷たい言葉や迷惑かもしれないという思いがストップをかける。

不自然に遅く帰るのをやめたにもかかわらず、これほどまでに彼に会わないということは、彼が会いたくないと思つての証拠のようにすら思えて。そうしたら、余計身動きできなくなつた。

「馬鹿だねえ」

公園で、友達と一人。田の前でカフェオレを音を立てて飲んだ彼女は、ちらりとこちらを見る。

「馬鹿だつてわかつてゐるよ」

「いやわかつてないね」

手の中のパックをのむ氣に慣れずに、右に左にと手遊びひしつひしつ  
むけば、彼女のため息。

「つてかさ、いい加減ほかの男にも田を向けなつて」

「……そつはいつても、ねえ」

「あんた、ガード固いんだよ。氣になつてゐやつ、いないわけじや  
ないんだ。もつと氣樂にいきなよ」

ぶらぶらとベンチから降ろした足を揺らす彼女の、短いスカートが  
翻る。

少しだけ奔放な彼女。だけど、その言動や外見に比べて、彼女こそ  
ガードが堅いのを私は知つてゐる。  
その彼女に、こうもいわれるとは。……少し考えたほうがいいんだ  
らうか。

「んー……考へてみるよ。なんか、うん」

「そつしな」

軽く返して、彼女が笑う。美人だと思つ。派手目の美人。だけど、  
笑うとかわいらしい。

……彼女みたいに大人っぽい外見だつたら、もう少し彼は、私を見  
てくれただろうか。

そんな埒もなことを考え、また、ため息を漏らした。

「ただいまー……」

扉を開ければ、ふわりといいにおいが漂っていた。  
ぐづ、と、現金なおなかがなる。思わずペчиりと一度おなかをたたいてから、ダイニングへと向かつ。

「あら、お帰りなさい」

ぱたぱたと台所で料理をしていたりじき母が、振り返つて笑つ。

「ただいまー。あー、おなかすいた。ねえ、『はんすぐ?』

鍋を覗き込みながら言えば、呆れたよつぱりうつと頭をたたかれて。  
「ええ、すぐできるから着替えていらっしゃい。ひやんと手も洗つのよ」

まるで小さな子供に言つよつて、くすくすと笑つを含めてこつねじ、  
はーい、と、わざと幼い返事を返して。

ダイニングを出ると、一階の部屋へ。制服を脱ぎながら、ふと窓の外をみれば、隣の家が見える。庭と、家。そして、あの、見えそうで見えないぎりぎりの場所にある窓が、彼の、お兄ちゃんの部屋。カーテンが閉まつたままの様子に、相変わらず忙しいんだろうな、と、思つて苦笑する。

結図、彼のことを奪えてしまつてしまつ。

本気で、新しい恋を探したほうがいいのかな、なんて。そんな風に思つた。

「あ、いこといひ。これ、お隣にもつていて

着替え終えて下に行けば、鍋と回覧板を用意した母がじつじつ笑う。

「えー……おなかすいたの？」

「わざわざと行く。早く戻つてらっしゃいよ」

「はーい」

しぶしぶと、それらを持って家を出る。窓もしまつてたし、カーテンもしまつてたから不在のはず。おばさんには渡してわざわざと帰らひ、と、隣の家のチャイムを押せば。

「はーい」

「おばさん、回覧板とおすそ分け持つて來たー」

「はーはー、ちょっとまつてねー」

インターほんから明るい声。つらわれるように笑顔になる。しばし待てば、足音。……おばさんにしては焦つたような？ 少し首をかしげていれば、ばたん！ と大きな音がして、玄関があいた。

「あ……」

「……久しぶりですね」

彼、だつた。どこか焦つたよつな様子で、扉を開けた彼。まさかい  
るとは思あなかつたので少し焦る。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板…」

「ぐい、と、勢いのままに渡して。

「じ、じやあ。おじやましましたー！」

「あ、待つてください」

ぐるつ、と踵を返そつとしたら、引き止められて。

余計にあせる。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ち  
ゃん忙しこのに、なんか邪魔ばっかで。うん、だいじょうぶ、私は  
平氣だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらつ  
て。がんばってみようかなーつておもうんだ！だから、うん。い  
ままでありがとうね、お兄ちゃん！」

焦つて。言わなくていいことまで、言つたかも、つて。氣づいたけ  
ど。出でしまつた言葉は、戻せなくて。

振り返ることもできないまま、立つてくしていれば。それまでずつ  
と沈黙していた彼が、深く長い、重たいため息をひとつ、漏らして。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。」

引止めで済みませ

ん。おばさんにお礼いっておいてくださいね」

そうこうひし、じばりくして、ぱたんとお闇の閉じる音。

……あ。

そのまま、ビニンが茫然とした足取りで、家まで帰る。

「ただこまー……」

「おかえりな……っ、ちゅうと、ビニンたのーっ。」

リビングに入れば、母が焦つたよつと顔でひっかけ寄つてきて。

「え、なに?」

「なに、つひ。……あなた、気ついてないの?」

ビニンが痛むつた表情で、そつとほほに触れる母の手。

あ。私、泣いてたんだ。

「…………」

「じじいし、と、田元をねぐえば。それ以上何も聞かず」。

「さ。ご飯にしましょ。今日はパパも遅いし、一人で食べるわよ。

あつたかーいのおなか一杯、食べなさい」

そう、そっと肩を押して、テーブルに促してくれた。

晩御飯は、ちょっとだけ、塩味が効きすぎてる気が、した。

#### 4・背伸びをやるのはやめなさい

「じ、じゃあ、お試しつて」と、「

目の前で照れたように笑う人に、頷いた。  
どこかぎこちない私の笑顔に、隣に付き添っていた親友が、ばん！  
と背中をたたく。

「こつたあ……」

涙目になりながら背中を抑えれば、にやにや笑う親友。

「ま、気楽にいきなよ。な、彼氏候補君も、やつおもつだらう」「ひだり

「あ、ええ。僕としては、お試しでも付き合つてもうりえるだけラッキーフリコウカ！」

真っ赤な顔で、綿綿と言い募る少年に、思わず顔がほひるぶ。  
うん、大丈夫な気がする。お試しだけど。この子となり、やってい  
けそう。

ちりりと浮かんだ面影は、見ないふりしげゆつと胸の奥で握  
りつぶした。

つまり、何がどうなったかといつと。

あまりにどんなよつしていた私の様子に、クールなようで人情家な親

友は、さあはけ、とばかりに問い合わせてきて。答えないわけにもいかないというか……たぶん、私自身が話したかったんだと思う。お兄ちゃんとの会話を、話して。呆れたようにため息をつく親友が、ならば、と、提案したのが。

実際に、お試しあつきあいをしてみましょう大作戦。

長いよ、と突っ込んだら、ドコポンされた。ひどい。

まあ、実際お試ししたいといつても、相手がいなきやどりしようもないよという私に、親友はにやりと笑つて。実は紹介してくれつていうの、数件あつたんだよねー、と、語尾をハートにはねさせながら、告げてくれた。

驚く私の状態もなんのその、その数名の名前を挙げ、そのうえでお勧め、とこう少年にその場で電話。お試しあつきあい、とこう条件に了承を得て。

そしてその日の放課後にご対面。冒頭に戻るわけで。

そんなわけで、生まれて16年。初めて彼氏ができました。仮だけどね。

で、どうしたらしいのかわからない私は、とりあえず、少年と一緒に帰宅することになつて。朝も、路線は違うけれど駅で合流できそうだと少年がいうので、そうすることになつて。ただ、慣れないからどうしていいかわからなくて、無言のままもくもくと一人で歩いて。いや、少年は最初一生懸命話しかけようとしてくれたんだけども、私がうまく返せなかつたっていうか。しょうがないけれど、そんな風な状態で。あれー、私ってこんなに人見知りだったかなあ、

なんて、疑問に思いながらも、一応こいつ、たまには一緒にお昼を食べたりとか、放課後ちょっとだけ寄り道したりとか。そんな風に彼氏彼女っぽく、それっぽく、過激してはいたのだけれど。

……違和感、といつか。隣を見て、たまに話が弾んで、顔をみたら、少年で。その瞬間に違つ、なんて思つてしまつ自分がいて。そのまま黙つてしまつ私に、少年は心配してくれるけれど、『しまかすしかできなくて。

少年は、たぶん、本当に私のことを好きでいてくれるんだなつて。会話の合間の照れたような仕草や、声やら、時々たぶん手をつなぎたいのかなつて感じで動く手から、感じられて。

少年のことを好きにないたら、最高に幸せになれるんだろうな、なんて。思つのに。

手をつなげるとされたのを、思わず、静かに避けてしまつたり。触れよといとする手の温もりが怖くて、体を引いてしまつたり。

……そんなことを繰り返して、次第に気まずくなり始めた、頃。

「トートしましょ」

そう少年が、いつから。思つてつめた表情で、まつすぐにいつから。潮時なのかな、と、頷いた。

田曜日。

近くの繁華街で待ち合わせて。一人で、映画を見て。食事でもしようか、と、街を歩いて。

「……おや

よく知つた声が聞こえて、びくり、と、体が震えた。彼だ。間違ひはずがない。こわばつた私に、不思議そうに彼は近づいてきて隣の少年に気づいて。

ペコッ、と余糸する彼に、少年も、訝しそうに余糸を返して。

沈黙。そして。

「……デート、ですか」

ぽつん、と、聞こえた声に、はつと顔を上ると、じつといひを見つめる彼の眼があつて。

答えられなくつて、どうじょひつて思つてたら。ぐ、つと、腕を引かれて。少年がいたんだ、って、振り返ると、ビリか真つ直ぐな強い目で、彼を睨むようにみる、少年の姿。

「デートです。失礼します」

ペコッ、と、再び少年は頭を下げる。私を引つ張るよつて歩き始めて。

「あ、え、ちよ。ひ、おここちや、またね」

それだけを彼に告げて、引かれるままに少年と共にその場を後にした。

すんすん、すんすん。少年は足を止めることなく進む。つこて行くのに必死で息が上がる。やがて少年は、小さな公園へ着くと、やつと私を振り返つて。はつ、と我に返つたよつて手を放すと、申し訳なさそうに眉を下げた。

「「めん。……勝手なことして」

何も言えず、首を振る。息が苦しい。

「あの人、好きなんだね」

はじかれるように顔を上げれば、切なそうな痛そうな表情の少年。

「「、「めんなさ」。」めんなさ」……」

「謝るな！」

大きな声にびくり、と、震える。おびえに震づいて少年は、昂ぶりを抑えるように息をついて。

「……忘れるため、だつたんだね。ねえ、僕じや、だめ？」

じつと見つめながら。切ない、痛むような目を、向けながら、彼は静かに、静かに言葉を紡いだ。

「たえなんて、ひとつしか、持つてなかつた。

とぼとぼと、家路をたどる。

夕暮れの街は、朱色に染まって。周りの人は忙しそうに歩いている。とぼとぼ、とぼとぼ、と、うつむいて歩いていると、ふと、足元に影が見えた。

視線をす、つとあげれば、目の前に彼。無言で、じつとじつと見み

てこる。

「おっこ、やが」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないですか？」  
そんな、今にも泣きやが  
な顔して

すっと伸びた手。近づく手。そのままやがくつと田じりに触れる指。一度田を開やして。開けば。  
彼が、かなり近くにいて。どきん、と、心臓が高鳴った。  
いけない。いけない。期待させないで。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何もないもの」

す、つと、一步下がる。これが私とお兄けやんの距離。近づきやが  
いけない。近づけない年齢の距離。

笑え。笑うんだ。

「ちよっと、喧嘩しただけだよ。付き合ひにいんだから、そんなこ  
ともあるよね」

「めんね、つて。謝ったんだ。また。  
もう無理だ、つて。」めんね、つて。

「ちよっと、笑ってくれたんだ。」

でもあきらめなこよつて。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私も  
もう高校生だよー」

くすくす、笑つて。そつ告げたら。

気が付けば、抱きすくめられていた。暖かい腕の中に、包まれてい  
た。

お兄ちゃんのにおい。彼の、温もり。ぐらり、と揺らぐ心地、一瞬  
茫然と仕掛けて、あわててそこから抜け出そうとして。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。『まかせると  
思つんじやありませんよ』

柔らかな、声が、耳元で聞こえて。

私は、身動きすら、できなくなつた。

## 5・今後に期待、しています

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかったです。

ただ、彼しか見えなかつた。

ずっと、ずっと。

ただ彼だけを、見つめ続けてきた。

ただ、それだけだつた。

心臓が、破裂しそうだ。

回された腕から伝わつてくる温もり、とか。  
頬に触れる胸元の堅さ、だとか。

ふわりとかある、彼の香り、だとか。

くらくらとめまいがする。呼吸があほつかない。幸せで、嬉しくて  
うれしくて 悲しくて。

このままじゃいけない、と、ぐっと体を離そつとした。

けれど。

逆に強く抱きしめられて、私はただ混乱する。どうして? どうし  
て? なんで?

むらさみ、ぐいぐい、心が期待する。ダメだつてわかつても、でも、期待してしまつ。

「 酷い。ひどいよ、お兄ちゃん。」

あまつに苦しへ、まろつ、と、涙が零れ落ちた。

「…………、なにして、るんですか」

鼻を小ぐさすた音に気付いたのか、巨感つよい声が聞こえて、少し腕が緩む。

その隙に少しだけ離れて、覗き込んで来ようとする彼の顔を避けるよひ、顔をうつむける。

「 なかなかいで、ぐだれこ」

再び伸ばされた手。思わず後ずたれば、息をのむ音がして。

ひりく、と、一つ、呼吸代わりに泣いてから。

「 ひどいよ、お兄ちゃん……」

声は、酷くかすれていた。湧き上がる想いと悲しげと、すあすあする胸が、つらくて哀しへ。我慢できなくて。私は叫んでいた。

「 ひどいよ、ひどい、ひどい、優しくするのよ。恋愛じつひじつて、子供つて……こつたじやない！ 私なんか、邪魔なんじょつ？！ だったら、優しくしないでよー。構わないでよ、お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……ひ、ばかー！ お兄ちゃんなんて、だいわー……」

… つ

最後まで言えなかつた。再び、私は暖かな腕の中こたりわれていて。強く強く、抱きしめられて、息が詰まる。びひじて、びひじて。それしか言葉が浮かばない。ぐるぐるぐるぐる、嬉しい幸せと悲しいともひ、感情がじぢやませで、びひじていいかわからなくて。ぎゅ、と、お兄ちゃんのシャツの胸元をつかむ。

「……すみません」

抱きしめる手は緩まないまま、耳元で声が聞こえる。吐息。震える声。くすぐつたくて身をよじれば、しつかりとホールドしたまま、しかし顔を見られるくらいの余裕が生まれる。深呼吸。苦しかつたふわり、とお兄ちゃんの香り。ずきんと胸が痛む。苦しくて、顔があがられない。

「なにを、あやまつてるの。離して、もひ、迷惑かけない、から」

震える唇を比喩して、必死で言葉を紡ぐ。

「違つんです。あんないい方して……すみません」

声には、苦渋があふれていて。苦しそうで。はじかれるように顔を上げれば、悲壮な表情をした、彼の顔がそこにつって。

「ちがひ、つて……」

茫然と見上げれば、深くため息をつく彼。そして、彼はギュッと強

く皿を置かず。

「……今、何歳ですか」

「え……と、16、だけど」

今更なにを、と、首をかしげる。とたん、瞼を開いた彼は、強く眉を寄せた。

「もう、あなたはまだ16なんですよ。まだ、いろいろと、大人としては、対応に困る年齢なのです」

ぽかん、と、してしまつ。

「え、でも、結婚できる年だよ」

「確かに、法律上はそうですね。しかし、条例上だと……その

視線がすい、と、そらされる。

青少年保護条例、だつたつ? うる覚えのその文字がぽん、と、浮かぶ。

何がいいたいんだろ? わからなくて、じつと見つめれば。

「つまり、あと2年。せめて高校卒業するまで、と、思っていたの定められて。

「つまり、あと2年。せめて高校卒業するまで、と、思っていたのですよ」

「……え？」

「小ちこじゅから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。それに魅了されない男がいると思いますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐつたくて心地よくて、愛しくて　だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

「なに。何をいつてるの？　彼が言いつてる言葉は、わかるのに、理解できない。

頭が真っ白で、茫然と見返してしまつ。

「せめて、高校を卒業してから。それから、一緒に、はぐくんでいければ、と、思っていたんですよ。ゆっくりと、大切に、心と、思いを。　大切だから、愛しいから、ずっと、ずっと、ずっと、そう、思つていたつていうのに」

「……お、にいちゃ、ん」

ふう、と、彼はため息をついて。それから、私の大好きな笑顔を浮かべて。

「好きですよ。大好きです。　だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆっくりと、大好きなお兄ちゃんの大きな手が、髪を撫でる。茫然とした私の頭に、言葉がじわ、じわとしみこんでくる。ゆっくりと、顔が熱くなつてくる。うや、うやだ。でも、目の前で彼が優しく微笑んでいて。その目が、とろとろ甘い熱をはらんで、いて。

「……あき」

零れ落ちた言葉に、彼の顔がさらに笑顔になつて。

嬉しくて、嬉しくて。

『気が付けば、私は、大きな声でないていた。  
小さな小さな子供のように。彼に遊んでもらっていた、小さなころ  
のよう』。

彼は、ただ、静かに、静かに、抱きしめて撫でてくれていた。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

落ち着いた私に、彼がいつ。

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに  
普段めったに泣かないし！」

「やうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるのを見てる気  
がしますよ」

「さ、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なにしませんか？」

「つ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……銳意努力します！」

くすくすと、笑って。彼は。

「今後に期待、しています」

そっと、耳元に囁いた。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかつた。

ただ、彼しか見えなかつた。

だから 。

恋かどうかなんて、関係ない。

やることあるのは、きっと、愛なのだから。

## 1・誰にでもスキだらけ

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。  
簡単に言葉になんて、できるわけがなかつた。

「おにいちゃん、だいすき！」

はじけるような笑顔で、叫ばれるたび、誇らしくうれしくて照  
れくさくて。

ただただ無邪氣でいられたのは、幼いころだけ。

思春期になれば、感情は複雑に揺らいで。愛しいけれど、大切だけ  
れど 真っ直ぐな感情が、どこか煩わしくて。

どこかつづけんどんな対応になつていていたその時代ですら、彼女はま  
つすぐに、ただひたすらに、こちらを見ていてくれた。

それが恋なのか、ただの家族愛なのか、なんて。  
きっと答えは、まだわからない。

中学、高校、大学、と。

別に彼女がいなかつたわけではなかつた。それなりの付き合いもし  
たし、それなりの相手もいた。

ずっと、彼女を見ていたわけじゃない。ずっと、彼女を思つていた  
わけじゃない。

けれど。

気がつけば、まっすぐに向けられるその視線を、探していた。

腹をくくるまでに、時間がかかったのは、自分だけの秘密。

大学時代に、運よく賞を受賞できて、卒業するにはありがたいことに作家一本で食べていけるようになつていて。実家とは別に部屋を借り、そこで作業することが増えて。

時折帰宅した実家以外で、彼女に会つことが少なくなつたとき、ちようど彼女が受験だと知つた。

高校受験。年の差を如実に実感して、苦く笑つたそんな思い出。

そして。

「おばさん、許可貰つたんだ！」

幼いころと変わらない、まつすぐな思慕を浮かべ、はじける笑顔の少女が、田の前に、いる。

仕事場のマンション。ある意味一人暮らしの男の部屋へ。

幼いころと変わらぬ笑顔でありながら、その姿はすでに羽化を遂げたかのようだ。そう。たとえるならば、花開く寸前のつぼみ。みずみずしさと若々しさをたたえながらも、どこかしつとりと艶を帯びる。

いつのまにか、成長していた彼女の姿に、戸惑う。

仕事に集中しなければ、と、画面には向かうものの、わかっているのか甘えてくる彼女に、心が、体が揺らぐ。

学校帰りなのか、ブレザーの制服姿のまま、短いスカートを揺らして無邪気に構ってくれと甘える彼女。

それに不埒な思いを抱かない男がいることに、気づかない、なんて。

苛立ちが、起る。

そんな風に、他の男にも甘えるのだろうか。そんな短いスカートで、学校へ通っているといつか。

その笑顔を、周りの誰にでも見せているのだろうか。 そんなにすきだらけ、なのだろうか。

「のまま、押し倒すことだつて、できるといつた。

浮かぶのは不埒な思いばかり。軽く頭を振つていれば、彼女が、その言葉を口にした。

「……好き」

まっすぐに彼女を見つめる。

これ以上は、耐えられない。これ以上は、無理に決まつている。

「恋愛<sup>ラブ</sup>になら余所でやつなさい」

深いため息と共に、そう呟げれば、凍りついたよつて顔をじわばらせる彼女。

ああ。そんな顔をさせたいわけじゃないのに。けれど、このままだと、彼女を傷つてしまいかねない。

「……だつて」

「でももだつてもあります。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合つてゐる暇はありません」

わざわざと帰つたなさい、と、そう短く告げて。意識を彼女から引きはがす様に画面に向かへ。

「あ……の……」

かけられる声にこたえなくなるけれど、答えられない。きつきつと引き絞つた理性の糸は、はじめ飛ばんばかりに張りつめているのだから。

じばりく、じつと見つめる視線を感じていたけれど、やがて諦めたよつと部屋を出していく彼女。

ぱたん、と、玄関のしまる音が聞こえて、体からやつと力が抜ける。

あんなこと、言いたくはなかつた。

抱きしめて、囁いて、口づけて。とろけるほどに、愛したかつた。

けれど、彼女は、まだ幼いのだ。

15歳。もつすべ16だらうか。

歳の差はいくつになるだらう。ロリコン、と、呼ばれないきりきつラインだらうか。

花開く寸前の彼女の色香に、惑わされてゐる自分に、呆れてしまつ。もし、その思いのままにぶつかれば、彼女はきっと今以上に傷つく

に違いない。

なうば。

待つしか、ないのだ。

あと、少し。せめて高校を卒業するまで。

彼女が、本当の意味で花開く日まで。

「これは、かなりきついですね……」

漏れるのは、ただ深いため息ばかりだった。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

身動き取れない、時もあるのだ。

いつからだらう。

いつから、変わったのだろうか。

ただ愛しい、かわいい、それだけで済まなくなつたことに気づいたとき。

静かに、その思いを、胸の奥底に沈めた。

そう古くない、数年前の記憶。

幼いころは、よかつた。何も考えずにすんだ。かわいい妹、そう、いうなればそんな存在。

真っ直ぐに向けられる感情もくすぐつたくて、どうせ勘違いのいつかは消える思いだらうと思つていながらも、悪い気なんかするわけがなくて。ただ少しばかりうつとおしいな、と、思わなかつたわけではないけれど、それでも、かわいい妹分、だつた。

それが変わつたのは。

いつだつたか。

共にお風呂に入ることもなくなり、目の前で着替えることがなくなりつていつた、彼女の小学校高学年時代。

それでもまだまだ、ランドセルを背負つた姿は、幼い子供でしかなくて。まっすぐに甘えるのを、いなしながらあやしていく、そんな記憶。

もちろん、そのころから彼女の体は間違いなく女性として成長を始めていて。

……こころと変化があつたことは、母経由で漏れ聞いては、いた。

けれど。

はつきりとその変化を思い知られたのは、間違いなく、あの時。

彼女が中学に入学したとき、ではないだろうか。

はじけるような笑顔で、届いたばかりの制服を試着した彼女が、転がるように跳ねるように隣の我が家まで来て。とてもうれしそうにその姿を見せた時　たしかに、驚かされた。

間違いなく、彼女は成長していて。

女の子から少しづつ、女性へと変化をしていて。

その事実に、ショックを受けたのと同時に、そのショックを受けた自分にすら、衝撃を覚えたのは間違いない。

歳の差や、もうもろ。

もしかして自分にはそういう性癖があったのか、と、それらしき資料を探したり映像をみてみたりもしたが、ほかの少女らの姿を見ても、どうということはない。

なのに、なぜ、彼女の変化に戸惑い、そして心をゆすられたのか。

……少し考えれば、簡単に答えがでるにも関わらず、その答えを出しまでに、そしてその答えを受け入れるまでに、3年ほどかかってしまった。

理由は簡単。

往生際が悪かつた、ただそれだけのこと。

理解してしまえば、今度は別の壁が立ちはだかる。いくら彼女が成

長したといつても、まだ未成年。否、せめて18歳までは、と、思つてしまつのは、古臭い考え方のだらうか。それでも、愛しいと、大切にしたいと、そう思つ相手であればこそ、それまでは我慢の時なのだと、強く言い聞かせつゝ、今までと変わらず甘える彼女に理性を試されることも多数。自分の自制心に、これほど感謝した時期は、ないだらう。

無邪気に抱きついたかと思えば、そのまま隣で寝ついてしまう彼女の、その無防備さ。その穏やかで幸せそうな寝顔に、伝えられない想いを、静かに囁いた。まだ、それで十分だったから。

けれど。

年を取らうが、年上だらうが、いつも穏やかに心広くいられるわけではない。

無防備な彼女に、まっすぐな彼女に、獸性が目を覚ましかけることも多々あって。それを抑え込んでいるうちに、少しばかりその無防備さに、隙の多さに、無意味で勝手だとわかつていながらも、妬心を抱いてしまうこともあるわけで。

それでも。

あんな顔をさせたかったわけでは、ないから。

会つてフォローしなければ、と、ちょうど締切が重なつてはいたけれど会間にこまめに実家に戻つていったのだけれど、なぜか、彼女には会えなかつた。

いや、なぜか、なんて、理由なんかわかりきつている。

彼女が会おうと思わないから、これまでのようになつたための行動をとつていなから。会えないのだ、という、事実。

少し時間ができて実家に戻り、リビングでくつろぎながらも、ため息が漏れる。隣家に行くべきか。いや、それで逃げられたらなんて説明をするへ、ぐるぐる回の悪循環の中、ふとみれば、母が電話をしていて。

……帰っていない、と。

連絡もない、と。

すぐに電話を替わり、探しに行くことを伝えて。  
家を飛び出したはいいけれど、どこを探せばいいのか、わからなくて。

焦る気持ちに押されるように、あわてつて視線を走らせながら町を走り抜けて。

公園に、たどり着いたとき。

ぱつさん、と、ベンチに座る、彼女がいて。

歩み寄れば、寒いのか身震いをする姿。安堵からため息が漏れる。  
と、それに気づいた彼女が焦ったように顔をあげて。

……心配しきりで、つい、憎まれ口がこぼれて。

とにかく、そのままでは、風邪をひかせてしまつ、と、手を引いて家に戻る帰り道。

そう。

時は逢魔が時。などと言い訳するつもりはないけれど。  
魔が差した、と、いうしか、いいようがない。

振り返れば、ほろり、と、涙が彼女のつるつとまろこ類を滑り落ちていつて。

それが、とてもきれいだ、と。どこかぼんやりと、思考の奥で、そういう、考えて。

気が付けば、触れていた。

その、すべりかな類に。濡れた後をなぐるなり、ゆっくりと、目じりをたどる。

濡れたその目が、自分を見つめ返して、ぞくりと背筋が泡立つ。大きく見開かれて、はつ、と我に返る。

いつたい、何をしていた！

あわてて手を引いて、握りしめる。

茫然と彼女が見つめるのが、どこか後ろめたくて見透かされているよつで。

このまま見つめられていたら、どこかが壊れてしまつたうで。

「つ。子どもはもう寝る時間です。さつさと帰りなさい」

家の前まで来ていたから、背中を押しながら家のほうへと向かわせて。

扉の前まで、どこかふらふらとたどり着くのを確認し終えた瞬間、駆け出していた。

自分の家へ。自分の部屋へ。

どうしたの？ と、のんきに問いかける母に、彼女は帰つたことだけを伝えて、階段を駆け上がり。

部屋について扉を後ろ手に占めた瞬間、そのままずるずると座り込んだ。

……馬鹿、か、と。

自分の、行動と、言動と。

省みたそれらの、あまりにも馬鹿さ加減と。触れた温もりとその感触の記憶から湧き上がるものの熱に、浮かされるよつで。

片手で口元を覆うと、座り込んだまま、しばらく動くことができなかつた。

気が付けば隣にいた。

振り返れば微笑んでいた。

はじけるような笑顔で、駆け寄つて、飛びついてくる。

それが、当たり前のことだった。

「……どうしたらいいんでしょうねえ」

つい、弱音を零せば、聞きとがめたのかちらつと母の視線がこちらに向く。

「……」となく冷たいその視線の意味は、問うまでもないだろう。はっきりと聞いてくればいいものを、聞かないところがありがたいのかたちが悪いのか、判断に困るところだ。

なかなか会えない、と、思つていたけれど。

より一層会えなくなるとは、どうしたことなのだろう。

以前であれば、何かと自分がいなこときでも、この家に来ていたといつのに、その行動がぱたりと途絶えた。

さらによれば、遠目で見かけることがあったとしても、彼女はちらなど知らぬ風情で、するりと田舎へ帰ってしまう。

文字通り、避けられている。

頭を抱えて唸りたくなるが、そんな行動をとれば、田の前の母の思つぽである。

まあ、それでも、いつもして何気なく実家に帰ってくる回数が増えた息子と、訪ねてくる回数の減った隣家の娘と、考え合わせれば何らかの答えはもつていいのかもしれない。

ぼんやりとリビングに居座る自分を、少しうつとおしこそうな視線を向けつつも、放置していくのだから。

「まつたぐ。少しは手伝いなさいな、でかい図体していい年して」「そうでもなかつた。キッチンに立つて料理をしながら、ぼやうつぶやかれた言葉は、とりあえず聞かなかつたことにして、立ち上がりと冷蔵庫へ向かう。

飲んでないとやってられないよな、と、冷蔵庫を開けると、ビールと発泡酒が並んでいた。迷わずビールを取ろうとしたところで、言えばして手をたたかれる。

「う、なにを」

「誰がビールとつていいといった。それは父さんの。あなたは発泡酒で十分」

ほれほれと発泡酒を押し付けられ、どこか理不尽な気分で眉をしかめれば、ふんと、母に鼻で笑われる。

「もつと売れっ子になつたらビールでもいいウイスキーでも飲ませてやるわよ。ああ、それ以前にもつと甲斐性がついてからかしらー」

おほほほほ、と、軽やかにわざといつに笑い声をあげる母に、ため息が漏れる。

かなり、こんじろじ機嫌がよろしくなにようだ。母は彼女が気に

入っていた。訪ねてくる彼女が、ほとんど最近顔を見せないとなると、不満もあるのだろう。ここは甘んじて受けるべきか、と、缶を片手にテーブルへ戻る。

と。

チャイムが鳴る。

密か？ もしかして？ とそちらを見れば、手が離せないらしい母がさえればしそちらを指し示す。

「あー、あんた、出で」

しうがない、といふぞぶりを見せつつも、心臓がなる。もしかして。もしかしたら、彼女が来たのではないだろうか。

年甲斐もなく煽る心臓をなだめつつ、少し小走りになりながら向かつた玄関で、扉を勢いよく開けば、驚いたように目を見開く彼女がそこにいた。

「あ……」

「……久しぶりですね」

茫然と、しかしどいか今にも逃げ出しそうな彼女に、焦る。

もつといづ、ほかにないのか、と、自分に情けなくなりながらも言葉を継げれば、彼女が焦ったように手に持っていた荷物を渡していく。

「あ、あの、これ。かーさんから。おそらく分けとあと、回覧板！」

ぐい、と押し付けるよつて渡されたそれを、思わず受け取れば、彼女はそのまま、頭を下げた。

「じ、じゅあ。おじゅましましたー！」

「あ、待ってください」

逃げるよつて去りうとする彼女を、引き止める。謝罪したい気持ちや、伝えたいけれど伝えられない思い。思わずつめた距離は、かなり近くて、そう、あと少し手を伸ばせば、抱きしめることができるほどの中間の距離で。誘惑に、心が揺らぐ。

けれど。

そんな自分の気持ちなど、彼女は知る由も、なく。

はじかれるよつて、彼女が視線を合わせぬまま、言葉を紡ぐ。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばっかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわたんだ、新しい恋でもしたらつて。がんばってみようかなーつておもつんだ！だから、うん。いまままでありがとうございました、お兄ちゃん！」

何も、いえなかつた。やめる、と、いつ資格が、自分にあるのか、とか、邪魔じやない、とか、言いたいことはいっぱいあるはずなのに、言葉にならなくて。きりきりと、胸の奥に、差し込むよつた痛

みを覚えた。

そうじゃない、好きなんだ。誰よりも大事なんだ。抱きしめて、そう伝えたい。けれど。見守るんじやなかつたのか、とか、彼女も変わらうとしてるんじゃないのか、とか、彼女の行動を止める権利が自分にあるのか、とか、次々と言葉が浮かんで消えていく。

ゆっくりと、距離を取る。

わざわざまでは、〇〇に近い距離。今は、少し遠い。

深く深く、深呼吸をして、動搖を鎮める。せめて、愚かな思いを隠しきれるように、と、それを願いながら、言葉を紡ぐ。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。」  
引き止めて済みません。おばさんにお礼いっておいてくださいね」

彼女の顔を、みることができなくて。

そのまま、静かに扉を閉じる。

手の中のお裾分けは、ほんのりと暖かくて、それが最後のつなぎりのようだ、思わず強く、握りしめた。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。  
簡単に言葉になんて、できるわけがなかつた。

だけど、自分は、どこで間違つてしまつたんだろう。

答えは、まだ、見つかりそうになかった。



「どうすればいいのか、なんて、答えがわかつていれば間違つことはないかつた。

わからないからこそ、間違つてしまつ。それが、人間といつものなのだろう。

物語の中で、自分が綴つてきた人物たちのことを思つ。

何もかもをわかつて綴つていた、自分は、もしかしたらいつのまにか、現実ですから心の中を見透かせるよつた気がしていたのだろうか。そんな愚かな自分を笑つたところで、何が変わるわけでもないのだ。

会いたい。会いたい。けれど、呟つて何を言えばいいのだろう。  
どういえばいい。どう説明すればいい。そもそも、何を伝えるといつうのだ。

好きだと。好きなのだと、今の自分に伝えられるだろうか。それが許されるだろうか。

ぐるぐると堂々巡りの中、仕事は容赦なく襲つてくれる。

締切がこんな時に重なるなんて、と、多少の苛立ちに紛れて、ひたすらに文章を書くことに没頭した。

不意に襲つてくる、切なさとあの笑顔の面影を、振り払つよつ。

会わなければ薄れる思いなら、それだけのことなのだと、痛感させ

られる。

集中が途切れた瞬間、彼女の泣き顔と言葉が、浮かんでは消えていく。

少し前ならば、会いたいと思つ間もなく、彼女はそばにいた。  
少し放つておいてくれないか、と、言つてしまいそうなくらいに、  
傍にいた。

今は、いない。

会うことも、ない。

恋愛(いこなむかわやうじなやせ)。

自分の言つた言葉が、自分に跳ね返ってくる。  
決めつけてそう告げた言葉は、確かに苦肉の策から出たものであつたけれど、それは言つてはならない言葉だった。彼女の想いを、気持ちを、勝手に決めつけてはねのけてしまった、言葉だった。

ふいに、不安がよぎる。

新しい恋でもしたらいつて。がんばってみよつかなーつてもう  
んだ！

もう、遅いのか。今頃、じうじて必死で仕事をしている間にも、彼女はすでに新しい恋を見つてしまっているのかもしない。もつ、自分のことなど、忘れてしまっているのかもしない。

それでいい、と、思つていたはずだった。

自分に一直線に向かい続ける思いだけではなく、いろんな感情を知り、いろんな出会いをしていくほし、と、そう願つていたはず

だつた。つい先日までは、それでいいと、耐えられる、と、思つていた。

しかし、今この「おまは何だらう。

想像するだけで、身を焼かれるようで、自分の中にこれほどの激情が眠つていたのか、と、不思議にすら思える。独占欲。嫉妬。どうどろと醜くも人らしい感情に、苦く笑いが漏れた。

どんなにあせらうが気にならうが、仕事は待つてはくれない。

締切が片付くまでのひと月。丸々とひと月とちょっと。仕事場から外に出ることもかなわず、ほぼ缶詰状態となつてしまつた。よほど切羽詰まつていたのか、鬼気迫る形相と、その思いの丈を昇華しふつけられて生まれた作品が、予想外に編集に好評価だつたのは、思ひがけない幸運だつた。

やつと解放された、日曜の昼間。

一度、隣家に訪ねていつたものの、彼女は出かけていた。ニヤニヤと隣のおばさんが告げた言葉に、嫌な予感がするものの、そのまま実家に帰る気にもならず、ふらり、と、街へと足を向けた。だからといって、何か用事があるわけでもない。ふらりふらりと人間を眺めながら、本屋でも向かうか、と、思つていた時だつた。

「……おや」

叫びださなかつたのは、年のたまものだといつた。

視線の先、同年代の少年と二人、並んで歩く彼女がいた。どこか初々しい雰囲気の二人は、そう、はたから見ればどこまでもお似合い

で、じりり、と胸の奥が焼け付く。

こちらに気がついて、驚いたように田を見張る彼女に、ゆっくりと歩み寄る。わざと不思議そうな表情をして、自然になるよじこと心がけながら近づいて、やっと隣にいる少年に気がついたそぶりを見せる。どこかと感づのように頭を下げる少年に、こちらも礼を返しながらつそりと観察をする。若い。当たり前だけれど、若く、そして、頭も悪くない。こちらをどこか訝しく見つめる視線は、すでにこちらをライバルだと見極めているようだつた。

「……デート、ですか」

しばし落ちた沈黙を破るように口を開けば、はじかれるよじに彼女が顔をあげる。見つめる先で、視線が不安そうに揺らぎ、困惑したように視線を話迷わせはじめる。

いじめるつもりではないのだから、と、せりに口を開けようとすれば、ぐい、と、彼女の体がひっぱられた。

見れば、少年がこちらを強く強く睨み付けながら、彼女を引き寄せていた。瞬間に引きはがしそうになるのを、必死にこじらえる。

「デートです。失礼します」

ペコり、と、再び少年は頭を下げる。彼女を引っ張るよじしながら、その場を離れていく。

「あ、え、ちよ。つ、おにいちゃ、またね」

振り返りながら告げる彼女の言葉を聞きながら、引き止めるよじもできただれど、素直に見送る。

焼け付くよじな思いが、胸を焦がすけれど、それでも、もし、彼女

があの少年を選ぶところのならば 幸せになれるのであれば、祝うしかないじゃないか。

引き寄せたくて伸ばしかけた掌を、強く、強く握りしめた。

それでも、未練がましいのは、情けないが性分だらう。

ゆっくりと時間をつぶす様なペースで実家へと帰り、玄関前で立ち止まり、隣家を眺める。

そのままテーーートを続けたならば、まだ当分帰つてこないだろ。初々しい雰囲気から、どうこうという関係にまでになつてないかもしぬれないが と、想像しかけてあまりの胸糞悪さに強く頭を振つてそれを追い払う。

口の中だけで、らしくなく低く悪態を漏らしつゝ、ため息をつくる。

あきらめが肝心じゃないか、と、自分に言い聞かせるよつと躊躇つて、門扉に手をかける。

と。

気になつて、振り返れば、遠くに人影がみえる。どこか消沈した風情で、とぼとぼと見るからにおぼつかない足取りで、ゆっくりとこちらへ向かつてきている。

見間違えるはずなんか、なかつた。

あわてて傍に駆け寄る。つむじで歩いている彼女は、いつも元気づかず、田の前まできてやつと、顔をあげた。

その表情が、まるで今にも泣きだしそうで、まわかとこつ思つから怒りがわき起る。

「おこ、おや」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？」 そんな、今にも泣きそうな顔して

自然と手が伸びる。ほほをたどり、涙が零れ落ちそうな田じりをぬぐう。その指の動きにのままに閉ざされる瞳に、誘われるよつた気がして、そのまま唇を奪いたい衝動を、必死でこらえる。

やがて、我に返つたよつて、彼女が身を離す。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何もないもの」

一步。彼女の離れた距離、これが、今の彼女を感じている距離なんか。

「ちよつと、喧嘩しただけだよ。付き合ひ始めたから、そんなこともあるよね」

歪んだ笑顔を浮かべ、必死で言い募る彼女は、気づいているのだろうか。

「だ、だから、大丈夫よ。もつ、お兄ちゃんは心配性だなあ。私も  
もつ高校生だよー」

彼女の、癖。嘘をつくときは、少しだけ、瞬きが増えることを。

必死に虚勢を張りながら、どこか歪んだ笑顔を浮かべ、小さく笑いを漏らす彼女をみていると、耐えられなかつた。

抱きしめていた。小さな彼女を、泣き出しそうになりながらも微笑む彼女を、そのままにしておけなかつた。

彼女の香りが、伝わる。温もりが伝わる。小さな体、しかし、すでに成長した、女性であるその体を、労わるよつに抱きしめる。硬直していた彼女は、やがてあわてたよつにそこからぬけだそうと、するから。

よつ一層、強く抱きしめた。

無理しなくていいから、そんな風に頑張らなくていいんだ。謝つてすむならば、いくらでもあやまるから、どうか、まかせなこでくれ。どうか、隠さないでくれ。

ありのままの、君の心を、見せてほしい。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。『まかせると思つたじやありませんよ』

ただ、それだけを願いながら、抱きしめたまま、彼女の耳にそっと囁いた。

## 5・狼まであと何秒？

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。

愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

簡単に言葉になんて、できるわけがなかつた。

だけど、みすみすほかの男にかつさらわれるなんて、指をくわえて見ていられるわけがない。

一度は、彼女が幸せになるなら、などと、物わかりのいい大人ぶつて諦めようとしたことなど、記憶の奥底へ沈めこんで、今はただ、抱きしめた。やつと、この腕の中に囲つことのできた温もりを、確かめるように抱きしめ続けた。

幸せになるならいい。

けれど、こんな顔をさせる相手になど、誰がくれてやるものか。

伝わる温もりが、ジワリと体の熱を煽る。普段はあまり強く脈打つことのない心臓が、拍動しているようで、その余裕のなさが彼女に伝わりはしないかと、不安がよぎる。けれど、それでも、彼女を抱きしめる手を緩める気はなかつた。離すことなど、できなかつた。

そうだ。

彼女が欲しい。

どれだけ言い訳しようと、大人ぶつかり、言葉を重ねようと、結局はそういうことなのだ。

今、腕の中にある彼女の温もりが、愛しくて、身じろぐ彼女を閉じ込めるように、強く、抱きしめた。

触れる腕から伝わる柔らかさと、その香りに、改めて彼女がもう少  
女から脱皮しようと/orしていいる年頃なのだと痛感する。特に香水など  
をつけていいるわけじゃないだろに、なぜこんなに甘く香るのか。  
人は、お互に求め合う相手の香りを心地よく感じるといふ。なら  
ば、彼女は、自分にとつて最良の相手なのだろつか。

油断すると、手が彷徨いそうになるのを、思考を巡らせることでと  
どめる。不埒な思いは、今はまだ封じておかなければならぬ。け  
れど、ああ、男はオオカミなのだ、などと、使い古されたフレー  
ズを使うまでもなく、間違いなく今、無意識の誘惑に振り回されて  
いるのだ。

けれど。

「……つ、ないて、るんですか

すすり泣くよつな声が聞こえて、焦りながら少し力を緩めれば、涙  
が目元から零れ落ちるところだつた。成長したとはいいまろ  
さを残す少女めいた頬を、静かに涙が伝う。綺麗だと、目が離せ  
ない。泣いている、泣かせた、という意識よりも、その、涙の流れ  
る様に、目を奪われた。

見つめる先、彼女はその視線を避けるように目を伏せる。ああ、隠  
れてしまつた。そつと覗き込むよつにすればむずがるよつに無意識  
にか首を振る。鼻をすするよつな音に、胸が軋む。

「なかないで、ぐださー」

途切れ途切れに告げた言葉は、どこか掠れてしまっていた。そつと、その涙をぬぐおうと手を伸ばせば、びっくりと彼女は、それを避けた。思わず、息をのむ。拒絶されたことで、胸が痛みを増した。

「ひどいよ、おこにけやん……」

うつむいたままの彼女がつぶやく。ひどく掠れたその声は、苦しそうに吐き出された。そして、勢よく顔をあげた彼女は、涙にぬれる顔をそのままに、じゅうじゅうを睨み付けながら叫んだ。

「ひどいよ、ひどい、ひどい、優しくするのよ。恋愛じゃなくて、子供って……いつたじやない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ。構わないでよ、お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……っ、ばかあ！ お兄ちゃんなんて、だいお……」

…

最後まで聞かず、再び強く抱きしめる。強く強く、彼女を支えるようつい、そして まるで自分がすがりつくかのよう。

胸が痛む。心臓が、激しく脈打つ。頭が真っ白で、血が上っているのか引いているのかわからない。わかるのは、自分が愚かだということ、そして、彼女を傷つけていたといつ事實だった。

腕の中で震える彼女を、ただ抱きしめる。体をじわばらしていた彼女が、やがて少しだけ力を抜いて、ぎゅ、といじりのシャツをつかんできて、再び心臓が激しく脈打つ。

「……すみません」

声が震える。まるで吐息のような言葉を、抱きしめた彼女の耳元で

それをやくもつに告げる。ひとつ息をついて、少しだけ腕の力を緩めるけれど、彼女は胸に顔を隠す様に埋めたままだった。

「なにを、あやまつてゐる。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える声が告げる言葉に、苦しくなる。

違うんだ。そりじやないんだ。本当は。

湧き上がる想いのまま、素直に言葉を紡ぐ。

16歳。結婚はできるけれど、まだ法令に保護される年齢である」と、そして、あと3年、待つつもりだったこと。

ぽかん、と見返す彼女の顔をまっすぐ見られなくて、視線をそらす。

「小さいころから、まっすぐ自分に向かっててくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。それに魅了されない男がいると思いますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐつたくて心地よくて、愛しくて　だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

せめて高校を卒業してから、それからゆっくりと、時間をかけられれば、と思っていた。本当にお互いを思いあうのなら、それでもいいだらうなどと、思われる余裕からか、勝手に判断していたのは愚かな自分だった。

「……お、にいちゃ、ん」

どこがまだ、茫然とした様子で見返す彼女に、一つ深呼吸して微笑む。

そう、愚かだった自分は、もしかすると年齢差を言い訳に、逃げて

いただけかもしれない。そう、彼女に間違いなく感じる愚かな劣情を、相手が幼いのだからと言い訳することで「ごまかして、逃げていたのかもしない。

もう、間違わない。

「好きですよ。大好きです。だから、誰にも触れさせないで。僕のものにしてください」

ゆつくりと柔らかな彼女の髪を撫でる。茫然としていた彼女の顔が、じわりじわりと驚きへと変わり、次第に朱に染まっていく。そのまま、愛らしくて愛しくて 口づけたい、と、思つ気持ちを、ねじり伏せる。

「……すき」

返された言葉は、ずっと何度も聞いていたにもかかわらず、今までに聞いたどの言葉よりも、心を満たしてくれた。

緊張の糸が切れたように泣き出した彼女を抱きしめて宥めながら、静かに、手の中にある幸運をかみしめたのだった。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

「や、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めったに泣かないし！」

「そつなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見てる奴がしますよ」

「あ、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なにしませんか？」

「つ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

そう、早く、名前で呼んで。

待つていられるのは、あと少し。理性はもう、ぎりぎりの綱渡りなのだから。

今まで待つた時間が長いから、これからもまだ大丈夫。

けれど。

「……期待、しますよ」

眠れる狼が目覚めないよつに、どうか、気を付けて。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

簡単に言葉になんて、できるわけがなかつた。

けれど、大切だからこそ、失えるわけがなかつた。

愛も恋も、関係ない。

君が唯一の、大切な人。

fin

## 1・そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。

いい人生だった、などと言つつもりは毛頭ない。

気が付けば80年、独り身で生きてきた。

さみしくないのなどと、親切ごかして言つてくる輩も、最後の方は何もいわなんだ。

いや、言つてくる連中ににじむのは、優越感と、そして血らもすでに忘れ去られた老人であるといつをみしをだらうか。

まあ、人のことなんぞ、知つたことじやない。

末は独居老人の孤独死か、見つけてくれる人間に当たがない以上腐敗がひどくならねばいいが、などと思つていたのだが、ありがたいことにどうやら病院で死ねるらしい。

大丈夫ですよ、頑張つてくださいなどと言つてくる看護師に、死ぬ人間に何を言うか、誰が今更頑張らねばならんと返せば、どうやら扱いにくい患者と認識されたらしく、必要最低限になつたのはある意味幸いだった。

次第に意識が遠くなる。すでに痛み止めの薬をぎりぎりまで使つている現状、もともと朦朧とした意識であつたが、最後に多少思考できたのはありがたい。

いい人生だった、などと言つつもりはない。

女一人、生きてきた人生の終わりなど、こんなものであろう。

そり。

終わりのはずで、あつたのだが。

気が付けば、白い空間に存在していた。

死んだはずだ、と、しばし思考にとらわれるが、やがて呼ぶ声が聞こえた。

生前の名前、そり、それに間違いない呼び声に、顔を上げる。

白い空間に白い幽霊がいた。怪しそう。何かの呪いか、マジックか。大がかりな設定で騙す気だろ？と、訝しく睨んでいれば、目の前の幽霊がもじもじと揺らいだ。妙に気持ち悪い動きだったために、思わず後ずさる。いかん、たいていのことは動搖せぬよ？になつたとおもつていたが、悶える幽霊はさすがに気持ち悪い。

ぐらぐら、と、体が揺らり揺らり、幽霊がよろよろとのびてきて、抱き留めてくれた。抱き留めてくれたのはいいのだが、その動きが何やら怪しい。気持ち悪くなつて、強く振り払えば、すすすつと再び元の位置に戻つていく。

なんだ、この幽霊は変態か、思わず思考すれば、ふるふると幽霊が揺れる。

「違いますよ、転んだら危ないと思つて支えていたんですね」

支えるの？めぐ必要があるのか、と、その言い分を無視していなならば、「まかす様にふるんふるんと」一度震えた。

「お願いがあるのです」

幽靈が叫びた。

「断る」

「や」を何とか

「断……る」

くらり、と思考がぶれる。なんだこれは。意識の中に何かが存在してこるような、かき回されているような 酔わされているような、そんな感覚が襲つてくる。ぐるぐると回る脳内を闇をいれて落ち着かせる。なんだこれは、まるで洗脳のよつだ、と、そこまで考えた時だった。

「洗脳なんてとんでもない…… ただの催眠です。」

よし、どうやら田の前にいる幽靈は、果てしない変態らしい。思考を読むなどと、変態の所業に違いない。激しく蔑んだ視線を向ければ、それすらも無視して、とつとつと幽靈は語り始めた。

「あなたには、ある世界へと転生していただきます。なにせ、80年間清らかな乙女であった魂など、いまどきなかなかありません。そこらの若い娘たちはどうにも、そのあたりが緩やかでして。いえ、愛の形はどうとかまわないのですけれどね、聖女や巫女として召喚するのに、なかなかそのあたりが難しくて。だから、どうしても若い娘さんを召喚することになるんですが、そうなると、今度は転生や召喚された後に、周囲のだれかとくつついてしまつんですね。それじゃ聖女や巫女として送り出す意味がない。ゆえに……このたび、あなたのような清らかな女性の魂を選び出し、厳

選して転生させることに決ましたのです。こうわけで、向こうの世界をどうかよろしくお願ひしますね。とりあえず、そこそこの年齢の成長した体に転生していただきますのでー。あ、そうですね、16くらいでいかがでしょう。では、どうぞ、いい異世界ライフ並びに、いいお仕事をお願ひいたしますー」

「こちらの視線をもうともせずに、一息だつた。ひとの拒否すらも聞かず押し付ける変態が。死ねばいいのに、と、糞みを一層強くすれば、再びもじもじと幽靈が悶え始める。

「そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。」

あほりしい。

半眼になつてしまつたのに気づいたか、幽靈は氣を取り直したように？ まつすぐになると、次第に光り始めた。

「それでは、異世界についていらっしゃいますかー。あとせよろしくお願いしますねー」

次第に強くなる光に視界を奪われながら、思わず口を開じるとふわりと体の浮く感覚がし始める。

だんだんとそれに伴い、薄れしていく意識の端で、幽靈が挨拶するように揺れるのが見えた。

「あ、そうそう、多少人より好かれやすい体質になりますのでお気をつけでー」

いらんがな。

とこりか、いつの間にへりとこりなつとるんだ。

そんな思いなべ、ビレ吹く風。

こりじて、私は、死と共に今まで生きた世界へ別れを告げ、わけのわからぬ幽靈のこりがままに、知らぬ世界へと旅立つのだつた。

「……いやあ、男性の30代超えて魔法使いとかその上の大賢者つてこりのは割とくるんですけどねえ。この場合、なんと呼べばいいのやう」

白い空間にぽつと残された幽靈の、つぶやくような声だけがありに響いていた。

2 僕に会いたかったって、正直に言つてしまつていいんですよ。

—×××××—Γ.—×××××—×××××—!

光が薄れれば、そこは見知らぬ場所だつた。石造りのどこか冷たい印象を与える部屋の中央、自分の足元には、いかにも怪しげな文様が光り、その周囲には大仰な服装をした、どこぞの仮装集団のよくな男どもが、その文様を囲むかのように立つてゐる。

はて、と、とりあえずは周囲を睥睨する。眉間にしわが寄るのは仕様である。長年しかめ面をしてたら、そつなるのが普通だと思うのだがいかがだらうか。疑問はいくつもあるが、まず一番問題なのはアレであろう。

「言葉がわからん、とな」

— × × × . . . ? — × × × × × × × — ? —

何かをいっていぬらしい、とはわかるのだが、一切こちちらには伝わらない。むしろわからない言葉なぞ、神経に触るだけだ。眉間の皺が深くなる。

「ええい、煩い。少しは黙らんか。男がペラペラペラペラと、軟弱な」

言葉に含まれた苛立ちが伝わったのか、沈黙が落ちる。しかし、これからどうすればいいのやら、とんとわからぬ。異世界とやらに飛ばされたこと、生まれ変わったこと、年齢は15・6であること、それ以外には何もわからぬ。そういうば、何をしろとも言われてな

かつたことを思い出し、余計しかめ面になる。この癖のおかげで晩年、顔が皺だらけだつたのだが、まあ、今は若いらしいのでよいことにしておいた。

さて、どうしたものか。

このままここにいても仕方がないのだが、と、睥睨しながら思案した。

じゅうじが思案している間に、どうやらあちらも思案しひそひそと相談をしていたようだつた。ひそひそと隠れるように言葉を交わすのは、一番偉そうな男とそこそこえらそつたまるで神職のよつた格好の男だ。神職といつても日本のそれではなく、なんとなく神職のようだ、という区別なのだ。

やがて話がまとまつたのか、えらそうな男が一步前に出てくる。身長が高い。2m近いのではあるまい。生前の身長は当時にしては高めの160近かったのだが、不思議なもので年を取るにしたがつて縮んでいったから、150cm半ばだらうか。今の身長は、ざつと逆算するに生前、若いうるに近によつた。それでも、見上げる位置にあるえらそうな男の顔を、睨むように見上げれば、男はたじろいだ様に目を見開く。なんぞ、この顔が醜いのだらうか、と、思わず顔に手を当てれば、男の表情がとろりと溶けた。……あまりのその変化の様子に、背筋に毛虫がはつたような感覚を覚えて後ずさる。あの例の幽霊よりも気持ち悪い。あの幽霊もたいがい気持ち悪かつたが、それ以上だ。

男はそんな様子も気にならぬよつて、とろけた顔のまま、じわりじわりとじゅうじに近づいてくる。それにつられるように睨み付けるま、じわりじわりと後ずされば、次第に人垣が割れ、壁際まで追いやられていた。おお、なんということだ、大の男が（おそらく）小

娘に向かつてそのような所業をするなど。

「いい加減にしとくれ！ いつたいなんだつていうんだい」

叫ぶように告げれば、男は宥めるかのように頷いて、ゆつくりと手を伸ばしてきた。どこかうつとりとした表情のまま男が伸ばす手を眺めてくると、そのまま頬に触れようとしていく、思わず呑き落とす。

「××……！？」

「簡単に触るんじゃないよ！ 気持ち悪いたらありやしない、なんだいここは、礼儀もへつたくれもあつたもんじゃないね」

腕を組んでふん、と、鼻をならせば、後ろから例の神職のような人が現れ、えらそうな男に何か言つたかと思うと、一歩前に進み出で、こちらに向かつて身振り手振りで何かを伝えてくる。

「××、××××××××！ ××××……××！」

しらんがな。

わからん言葉で言われたところでわかるわけがない。眉間にしわを寄せただ首を振つてやる。茫然とする神職らしき男に、えらそうな男が一言告げる。驚いたように神職が振り返り、一瞬否定らしき声をあげたが、やがて声が小さくなり、諦めたように頷いた。そして。

えらそうな男は、えらく威張つたような得意げな顔、ああ、生前に聞いたどや顔というのには「うつものだらうか、をこちらに向けて、一言何かを告げた。だからわからんといつて。そして、そのままぐ

つと身を寄せて、顔を近づけたと思つたら、顔を寄せてきた。……なにをするか、この変態が！

力一杯、男を張り飛ばす。本来ならば少し揺らぐかどうかであっただろうが、なぜかその威力は、絶大だった。男はすっとんだ。なんぞ？！ と、やつた自分も驚いた。周囲は茫然、飛ばされた男も茫然とこちらをみている。「つむ、やりすぎたか。えらそうな男である以上、えらいのである。えらい男を張り飛ばすとは、いろいろまずいかもしだ。だが、そうたやすく唇を許すほど、落ちぶれてはおらぬ。あれは初恋の遠き淡い思い出の太郎さんにささげた大切なものの、そのあと一切縁がなかつたとはい、それ以外にささげる気は微塵もない。

一瞬の躊躇ののち、しかし再び睨み付けていると、えらそうな男に騎士が駆け寄り、周囲を囲む。そしてそいつらが、手に持った剣や槍をこちらに向けてきた。まあ、こうなるわな。こりやどうするか、と、思案する。しかし、あの幽霊め、とんでもないといひに飛ばしやがつて。今度あつたら張り倒してやらねばならん、と、思つていたところに、である。

「呼びました？」

ひょー、と、白い幽霊。否、白い幽霊と同じ声の、光る人間が現れた。なんだこれは、と、見れば、周囲のえらそうな男ども一派が、どよどよとどよめいて額づいて礼をはじめる。おやどうこういふことだと、幽霊に視線をむければ、輝くような笑顔を返された。

「僕に会いたかつたつて、正直に言つてしまつていいんですよ。」

ふ、と笑いが漏れる。そうだ、笑顔だ、久々に笑顔が浮かんだな、

と、我ながらどうなのかと思つてみつたことを考えながら、元幽靈をみやる。

「会ったかった。殴り倒すために、な

そのままの勢いで平手を大きく振りかぶるが、するりとよけられ、そのまま嬉しそうに抱き留められる。

「ああ、あなたから飛び込んでくれるなんて。危機的状況まで待つたかいがありました」

なんだそれは。ふざけるでない、と、内心舌打ちしながら睨みあげれば、嬉しそうに「じこかし」と撫でさすりながら微笑む元幽靈の姿。

「じつこつ意味だ、なんだ、今まで様子をみていたとでもこいつのか

振り払いながら言えば、元幽靈は、照れたように視線をそらす。

「男のロマンについて研究しているだけです。危機的状況に落ちいつた情勢を助ける、ありがとうございます！ あなたにずっとついていくわ！ とこう展開、ロマンハジやないですか」

ありえん。

毛虫を見るような目で見つめれば、もじもじと身じろぐ元幽靈。気持ち悪い。幽靈の時でさえ気持ち悪かったのが、より一層気持ち悪くなっている。これどうしてくれよう、と、思つてると、やつと舌を取り直したのか、元幽靈が説明を始めた。

「実は、ぼくは神様なんです」

「……どうやら、元幽霊は頭がおかしかつたらしい。

「この世界の人間と何らかの形で見つめれば、ぱっと頬を染めて身悶える、自称神様。いや、気持ち悪い以外ないから、話を勧めてくれ。

「で、この世界が僕が作った世界ですね。で、あなたは聖女。本来、この世界の人間と何らかの形で交わることで言葉がわかるようになりますが……あなたにはそれをやつてもうつと困ります。ので、言葉わからないままでがんばつてください。あと、すぐきことですが、またそれは後日お知らせしますね。なにはともあれ、この世界で、のんびり清らかに生活してください。頑張つてくださいね」

「……帰りたいのだが

「無理です、諦めてください」

「深くため息をつく。はてさて、どうしたものか。どうしようもないのだが。

「ちらり、と、床に伏せている男どもを見やれば、ちらりちらりと気になるのかこちらをみている。視線がぱちり、とえらそうな男に合えば、ぱつと頬を染めた。きもち悪い。大の男の所業ではない。

「……こりこりの世界、間違つてないか?」

「諦めてください」

「こやかなままの自称神の答えに、脱力感が襲う。何はともあれ、このままこの世界で頑張るしかないらしい。

やがて、自称神は振り返ると、床に伏せた男たちが「よしよし」とも

じょもじょと何事かを告げた。ははーと、ありがたそうにそれを聞く男どもだが、言葉がわからないこちにはなんのことやらわからない。まあよからう、と、待つていれば、振り返つて自称神が言つ。

「それでは、彼らがこれから的生活の世話をしてくれますので。頑張つてくださいね。それに、そろそろアレが効いて来る頃ですね。ええ、きっとあなたなら大丈夫。検討を期待します。それではまた！」

にこやかに手を振れば、自称神は光に包まれて消えていった。

……いろいろと、だな。頑張つてなにをだ、とか、アレってなんだ、とか。わからないことがあるのだけれども、恐る恐るとこちらに近づいてきて礼を取る男どもが、身振り手振りでどこぞの部屋に案内しようとしているようなので、とりあえずついて行つてみることにする。

なにやら、その男どもの眼が、どうにも気持ち悪い気がするのだが、とりあえずは気にしないことにしておく。気にしたらいろいろ終わらな氣がするのは、氣のせいだろうか。

次、あの自称神にあつたら、必ず殴る、と、心に決めて、どこか気持ち悪い桃色な空氣を醸し出す男どもに連れられて、その怪しげな部屋を後にしたのだった。

### 3・僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。

丁寧に案内された部屋は、思わずたじろいでしまいかねないほどに豪華さで、今まで六畳2間のアパートにおいて人生の大半を過ごしてきた身としては一瞬足が止まつた。いやいや、貧乏性というなれ、女一人、一生働いたところで老後もらえる年金なんぞすすめの涙。貯金は当然しつかりしてはいたが、それでも無駄遣いなどできるものではなかつた。老後に豪遊生活何ぞ夢また夢、悠々自適ではあつたが質素な生活を送つっていたのだ。

しかしながら、こちらが躊躇する様を見せたところで何が変わるでもない。言葉が通じない故に、不思議そうにこちらを伺うばかりで事態が何か進むでもない。それならば時間を無駄にするよりもさつさと行動するに限ると部屋に足を踏み入れた。

促されるままにソファへ腰を下ろし、紹介するかのように綺麗な揃いの身なりの娘たちを紹介される。促されるままにこちらに向かいもごもごと何事かを言つては頭を下げ、を交互に繰り返していくのが3人、どうやらこの者たちが世話係らしい。世話係など、多少体の自由が利かなくなつた人生の最後の頃に世話になつたヘルパーさんたちしか記憶はない。一生を通して大病することなくほどほどで生きてこられたが故の僕倖ともいえるであろうが、そのヘルパーさんらが入るまでにも苦労をした。まず、最初に来たケアマネージャーなるものがえらく若く、若いだけならばよいのだが人をぼけ老人扱いしおる。最初からその対応だつたが故に、きつちりとその総括のところに連絡を入れれば変えてもらえたが、その後のヘルパーも数名、こちらの性格がねじ曲がつてゐるからか、勤められないと変わつていつた。はてさてこの娘たちはどれほどの根性があるものか、と、目を向ければ、ほっと恥じらうように頬を染める娘たち。

……なにごとだ。

もしや、男だけではないのか、と、すでに諦念を含んだ想いでため息を漏らせば、ここまで案内してきた男がどこか名残惜しそうに退室し、娘たちが動き始めた。一人はお茶の用意をはじめ、一人は隣の部屋へと向かう。残りの一人が隣に控えていれば、やがて何ともよい香りが漂い始めた。お茶はどうやら紅茶の類らしい。嫌いではないが、贅沢をいうならば緑茶が欲しかった。さすがにこの世界にあるのかどうかは知らんが、そのうちあの幽霊、ではなかつた、自称神とかいう存在が本当に神ならば、用意させるのもやぶさかではなかろう。用意されたお茶を横田で見つつ、娘たちを観察していれば、恥じらいつつも要領よく動くさまが目に留まる。なるほど、有能な娘たちらしいと、茶をいただいていれば、隣に向かつたらしい娘が、ドレスと鏡、くしなどを手に戻ってきた。といふかよくそれだけ持てるものだ、と、感心していれば、何やらいじりたいらしい。よからう、と、寛容な気分になつて、頷けば、髪をくしけずられ結われ、化粧をしようともされたがそれは断固として断つた。

さて、と、鏡を渡されて、うむうむと覗き見て、驚いた。

誰だこれは。

いや、確かに若いころの顔形によく似てはいるが、色が違う。黒髪茶色の眼、普通の日本人の色彩であつたはずの容姿が、金色に薄紅がかつた髪色に深い空色の瞳に変わつてゐるではないか。若いころはこれでも美人であつたのだよ。だからこそ、寄つてくる男どもにうんざりして徹底的に男性拒否するよつになつてしまつたのだがな。茫然と眺めていれば、心配したかのように声がかかる。いやいかん、

これくらいのことでも動搖するとは修業が足りぬ、と、さすがにあとから考えれば動搖せぬ方がおかしいとわかるようなことを無理やり考えて、頷く。

勧められるままに、健康であるのに介助を受けながら湯を使い、着替え、髪を結えば、感嘆の声が上がった。いや、なんというか。飾る必要などないだろ？ と、深く眉間にしわを寄せれば、困ったようにおろおろ彷徨う娘たち。何ともやりづらい。とりあえず大仰に髪に飾られた花をはずし、いくらか地味に変える。ドレスは、まだ納得はいかないが一番地味なものを選んだのだから致し方あるまい。

こうして、着替えを終えたのち、食事らしい様子で別の部屋に案内される。……なんと面倒な事よ。しかし多少は融通するのもよからう。我を通すのは状況が見えてから、今はまだ少しばかりおとなしくしておいて損はなかろ？ 案内されるままに向かったのは食堂らしき部屋、すでに席には先だっての王らしき男とその側近らしき男、神職のような男が座つており、周囲には人が控えている。こんな人の多い中で飯を食えというのか、と、不快を顔にあらわにしつつも、進められてしぶしぶと席に着く。

「××……×××……？」

わからんといひどる。

とにかく食事だ、と、手を合わせ小さくいただきますとそれだけはきちんと告げると、3又のフォークのようなものを使い、切り分けられた料理をいただいていく。正直脂っこい、というか、味が無駄に濃い。年よりの常で塩気の多いものを好んではきたが、これはあんまりだ。眉を寄せていくらか食べられそうなものをつまんで食事

を終えれば、じつと向けられた多くの眼があった。

何ぞ文句でもあるのか、と睨み付ければ、伝わったのか首を振る。

食事の途中で席を立つのはあまり行儀のよろしい行為ではなかろうが、これ以上は不要であったゆえに、そこで再び手を命わせ席を立つ。なにやらほにゃほにゃと言つていて、引き止めているような気配ではあつたが、知つたことか。微妙に注がれる視線に熱がこもつてゐるに気づかないとも思つたか。そんな視線の中に長くいる筋合も趣味もない。さつと部屋へと引き上げるに限るのだ。

部屋に戻つたら、再び湯あみし薄物の夜着に着替え、娘たちはてきぱきと働いて寝室へ案内すると一礼して扉を閉め去つて行つた。

はてさて。

思わず扉を睨む。いやな予感しかせぬのはなぜだらうね。周囲を見渡せば、動かせそうな家具がいくつかあつたため、サイドボードのよつなものと、椅子、その他もろもろを扉の前へ移動し、封鎖する。これでよからう、と、安心してベッドに向かつ。やれやれ、天蓋つきの寝台など、若い娘の夢物語だけの話だとおもつていたのだが。妙にふかふかとして柔らかすぎる寝台へと身を横たえつつ、腰を痛めねばいいがと、そんなことを考えながら眠りについた。

目が覚めると、朝方だつた。

「おはようござります」

何故に居る。

目の前にいたやかに微笑む自称神を半眼で睨みつつ、礼儀として薄物しかつけてない身をシーツにくるむ。とたんに脂下がる自称神。この変態が。

「いえ、僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。」

恥ずかしがつた覚えなぞ微塵もないのだが、どうやら相変わらず脳内お花畠満載のようだ。

「しかしながら、夜を無事に超えられたようで、さすが聖女と見込んだ方だ。夜中にあちら様もだいぶ頑張ったようですが、突破はならなかつたよ」

言われてみれば、扉の前に積んでた家具がいくつか動いている。どうやら力づくで突破しようとした様子であるが、それだけのことをしたのならば、大きな音もしただろ？ そんな記憶はとんとない。「それはもちろん、ぐつすり休めるように、調整と守護をかけさせていただいてましたから」

語尾にハートマークが付きそうな勢いで言われる。もうかれ、貴様。

ぞぞぞと、背筋に悪寒が走る。外の男どもよつよつの方が危険な

「酷いな、こんなに愛しているのに」

のじやないのか、と、身を引けば、輝かんばかりの笑顔で、自称神が微笑む。

「いやだな、この感情は、もともとはあなたのものですよ。あなたが長い人生の間で捨ててきた愛する気持ちと恋する感情のすべてを、私が受け取ったのです。貴方が捨てた物の再利用、つまりエコなんですよ。……まあ、少々受け取りきれずにおふれて、この世界の人々に影響を与えてしまってどうですけれど」

最後の方はかなり不穏だった氣がするのだが、と、眉間にしわを寄せれば、そつと近寄るように、まるでどこぞのジゴロか女衒のような甘つたるい仕草で自称神が指を触れる。即振り払う。きもち悪いと、ついに。

しかしながら、なんということだ。今までの人生ほぼ80年、そのうち70年少しの間、まともに愛だの恋だと縁がない生活をしてきたのだが、その弊害がこんな形で来るとは。ありえん、と思う気持ちと、自業自得かと思う気持ちのはざまで揺れ動く中、現実逃避するかのように、そういえばなぜこの自称神とやらは、神の癖にやたら人間臭い、しかも変態くさい行動をとるのであろうか、という疑問がぽん、と浮かぶ。もしさ、人間観察でもして練習しあつたか、それともそういう変態神なのだろうか。

「いえ、いつの間にか習得していたんですよ。」

今更のように言つのもなんだが、人の思考を読んで返事をするのは、楽と言えば楽だが変態以外の何物でもないと思うのだが。それに習得とは、もつとましなものを習得できなかつたのだろうか。頭痛を覚えて額を抑えれば、なだめるように髪をささつと触れて、男の手が離れていく。振り払われると学習したからか、かなり素早

い。やるではないか。睨みあげれば、うつとつと見つめ返された。

「つまり、そういう理由で、聖女たる貴方へ皆様愛を注ぐわけです。  
どうぞ、今まで足りなかつた分を受け取りつつ、清らかにまま頑張  
つてください」

さりげなくハードルを上げられた気がするのさ、気のせいであらうか。

「どうか、この世界で聖女として何をすればいいのか。まだ説明がないままなのだが、と、思つて見つめれば、にっこりとほほ笑んだ自称神が、扉に手のひらを向ける。とたん、積み重なつていた家具が撤去され、扉が開く。

「そろそろ侍女たちが来る時間でしょう。またじまばくしたら向こ  
ますね」

## 「またんか、この変態」

「冗談止めてくださいのはうれしいですが、それはまた次の機会に」  
そういうと自称神」と変態は、再び淡く光の中に消えていった。

それで、どうしたものがいい。

な」「やら」となんでもない状況下に「おかれて」いるらしいわが身を思いつつ、遠くからも「よもよも」というからりを読んでいたとき声を聴きながら、頭を抱えるのだった。

#### 4・心配しないで下せ、貴女に黙つて消えたりはしません。

人間といつものは、慣れる生き物である。言葉が通じなくとも文化や習慣が異なつていようと、意外となんとかなるものなのだ。現に、日がたつにつれて世話をする娘たちも世話することに慣れたようであり、言葉が通じなくともある程度は融通が利くようになつてきた。人間といつものは図太いものである。どんな状況であろうともなじむものなのだ。いやおそらく、自分自身の神経が図太いだけではないと思いたいところである。

この世界に飛ばされて、ひと月がたつた。その間、言葉が通じないなりに娘らに世話をされ、騎士らしきものどもに警護され、王らしきものやその側近らしきものどもと食事をし、神職らしきものに何やら話しかけられるが一切何もわからないのでスルーレ、夜は何やら怪しげな様子ではあるけれどもそれらを退け、異世界にいるにも関わらず平和に、たゞに言えば聖女といわれながらも何をしていいやらわからぬまま、説明がないのであれば知ったことではないと、太平樂に生活を送つていた。これでいいのか、と言わると多少困るが、しかしながらこちらが好きでここに来たわけでなし、説明させようにもあの怪しげな自称神はあれから姿を現すこともなく、首位の人間とは多少身振りで意思疎通はできるようになつたが言語に関しては全く聞き取れないがゆえに覚えることもできず、手っ取り早く体液を交換しようと図つてくる輩どもは、自称神がよこしたのか何やら怪しげな力で撃退しつつ、過ごしてきた。

平和なのはよいことははずなのだが、そろそろなんといふか、尻のすわりが悪い。働かざる者食づべからずで生きてきたせいもあるであらうが、正直に言つてしまはうならば飽きてきた、というのが本音であらう。

そう感じるまでにひと月ほどかかっているあたりどうなのかと思わないこともないではないが、平和であると感じているのは恐らく自分だけ、周囲はどうもそうではないらしい。人とかかわらないで生きてきた、とはいえ、人の感情の機微を感じ取れぬわけではない。それらを無視して生きてきた部分もあるが、感じ取れねば身は守れぬ。この世界へきてひと月、どうやら、この国の上層部らしき男たちの間に、焦りと苛立ちがたまり始めてこるよう見て取れた。

やれやれ、面倒事は嫌いなのだがね。

嫌いだといったところで面倒事の方が避けてくれるわけなぞあるわけもなく、理由が解れば避けようもあろうが、言葉が通じなければ細かなところまではわかることもできず、まあ、おおよそは体液の交換ができるいいあたりに要因がありそうなのだが、それがこの身をどうにかしたいという理由だけには思えず、言葉を通じさせたいだけにしては苛立ち具合が強いようであり、とどのつまり全くどうしようもない状態で、なるよつになれと過ごしていた。

そして、その時はきた。来るであろうな、とは思っていたが、どのような形であるかはさすがにわからず、想像はしたもののみそれだけはなかろうと思つていた手段で、きた。

目覚めて朝食のために呼ばれた席で、騎士に囲まれた。ついでに、なぜか傍付きの娘たちも、騎士に囲まれ剣を向けられている。目の前には王、その側近、神職らしき男たちが、どこか得意げに、満足げな顔をしてこちらをみている。どうやら、この娘たちは人質らしい。私一人であれば取り押さえられぬが、娘たちを抑えればよからうともおもつたか。深くため息が漏れる。やれやれ、こういう方向もあるうつと思つてはいたが、まさか本当にこの手段をとつてくる

とは、なんともはや、だ。

そんなこちらの様子に、主導権をとれたと思ったか、男たちがジワリと輪を狭める。さて、どうしたものか。娘たちなどしらぬと放置するもたやすいのだが、いい加減わけのわからぬ状況にあるのも飽きてきている。何をなすべきなのかどうしたいのか、そのあたりが解らぬままではどうしようもない。

思案することしばし、やがて男どもの中から王らしき男が、目の前にたつ。なんだその脂下がつた顔は、眉間に深く皺が寄る。全く、おそらく美形と言われる顔なのであらうが、あいにく西洋人風の顔の区別は全くつかぬ。きらきらしい髪色にきらきらしい目の色であるな、という程度なのだ。目の前で男は脂下がつた顔のまま、鼻息荒く何事かを宣言している。だからわからんといふ。

周囲が見つめる中、王らしき人は手を伸ばし、こちらを抱き込んでくる。ぞわぞわと嫌悪が背筋を走る。振り払おうと力を込めるが、なぜか振り払えぬ。今まで振り払えていたはずではないか、と、焦るが、その焦りすらどうか楽しむ風情の男は、満足げにこちらの頬を撫でると、何事かもじょもじょとつぶやいて、顔を寄せてくるではないか

なんということだ。このままでは危険すぎる、と、とつて足を振り上げる。

「…………」

衝撃に悶絶し、力が緩んだときに体を離す。どうやら見事に当たったようだ。狙うは急所、これは基本である。何とかのがれて、周囲が騒然とするうちに距離を取る。しかし、こんな時こそ、あの自称神は姿を現すべきであろうに、ひとつき、姿を現さぬまでもあることから、何事があつたのだろうか、それとも、神はやはり自称にすぎず幽靈であつたのではないだろうか。幽靈であるからには、消えてしまつた可能性もある。なんともはや、この状態で放置して消

えるとは、とんでもないやつだ。

「心配しないで下さい、貴女に黙つて消えたりはしません。」

気が付けば、後ろから包むように抱き込まれていた。振り払おうとして、今の状況に思い当りとりあえず耐える。しかし、心配していだ覚えはない。幽靈ならば消えたのではなかろうかと考えただけである。むしろキエロ、と、思えば、こちらの顔を覗き込みながら自称神が微笑む。

「相変わらずの天邪鬼ですね。シンデレ、つていうんでしたつけ？ 奥が深いですね」

天邪鬼になつた覚えもなければ、そんな奇天烈な生き物になつた覚えもない。それでも、それでも、助けられたことに一応の感謝を覚えなくもないのに、そのままで耐える。

「あなたに求められるまで、と思つたら、本当に思い出してくださいらないんですから。いけずな人ですね」

言われてみれば、このひと月、この時までもともに思い出しあしながらつたことに思い当る。思い出す必要もそこまでなかつたとおもわれる。

「まあいいでしょ、こいつして思い出してくだせつたのですから。

さて、お仕置きの時間ですね」

そつこいつと自称神の気配が、一気に変わる。殺氣、に近いだらうか、けれどもつと澄んでいる。いうなれば、莊厳なる神社の気配がもつと研ぎ澄まされ突き刺さるほどになつたような感覚と言えば近いか

もしれない。今までとは違う意味でぞくりと背筋を震わせれば、目の前の騎士たちがばたばたと倒れていく。地面に押しつぶされるようにならざるを得ない。ついでに、地面に倒れた騎士たちの中、最後までたつてているのは王・側近・神職らしき男の3人だった。その3人も青ざめながら、体をがたがたと震わせ、必死の形相である。

「『存知ですか。この者たちは、あなたの乙女の証を手に入れればこの国が救われると思い込んでいたのですよ』

自称神がすっと手を伸ばせた、耐えきれなかつたように男たちが崩れ落ちる。それでも膝立ちで耐える男たちに、自称神は低く笑つて、面白そうに眼を眇めた。

「あなたを愛するあまりと、伝承の間違い、それが相まつてのことでしょうが……愚かですね」

ひとつ突つ込んでもいいだらうか。それは、そもそも、自称神、いや、お前さんが、訂正を入れるかもしくはその、何やらあふれたらしき愛なるものを溢れさせなければよかつたのではないのだろうか？そもそも、それがなければ問題なかつたのではないのだろうか。溢れるのが仕方がなかつたのならば、こうして顕現できるのであれば伝承が間違つていい旨を伝えればよかつたのではなかろうか。なぜ、それをしなかつたといふのか。

自称神は、男どもに向けていた目をこちらに向けると、それまで鋭かつた目をとろりととろけさせ、ゆるりと笑みを浮かべた。

「いやですね、そんなこと。理由ですか？　その方が面白いからです」

……結局諸悪の根源はお前ではないか。

半眼で睨めば、自称神は頬を染め身悶える。なんだそれは、もう決められた行動なのか、と、諦めたように深いため息を漏らせば、自称神の手がするするとこちらの体を撫でさする。その動きの気持ち悪さにさすがに振り払い身を引けば、つつとりとその撫でていた手を見つめる姿があつて、ぞぞぞ、と体が震えた。

「すみません、人類の造形美に思いをはせていたところです」

きもち悪い以外に何を言えばいいのかもう分らぬ。

相変わらずのじぢらの蔑視の視線に堪えることもなく、自称神は輝かしい笑みをじぢりに向け、そして、宣言した。

「ああ、そろそろはつきりさせましょつか。 お遊びが過ぎました」

部屋の中には、床に這いつぶばる騎士たち、倒れ伏し気を失った娘たち、膝立ちで必死に苦痛に耐える王たちの姿と、その中で優雅に立っている自称神の姿、微かに聞こえるうめき声以外は何もないその部屋に、その声は低く、響き渡ったのだった。

## 5・一人は巡り合うために生まれてきた……違いますか？

「そもそも、何故あなたがこの世界に来る必要があったのか。お話をそこからですね」

いつの間に出現したのか、田の前にはテーブルがあり、一つだけあつた椅子を引き座るように促される。ちらりと視線を走らせれば周囲は床に伏したり膝をついて苦しげな風情の状態なのだが、それをどうこういったところで今はどつにもならぬとしか思えないため、素直に椅子に腰を下ろす。うつとりとして見つめてくるこやつは、さらりと人の髪を無断で撫でるとそのまま田の前の男たちに向き直る。

「過去、この国には複数名の聖女と呼ばれる娘たちが降臨しました。そのすべては、私が選び私が好ましいと思った清らかである娘たちでした。この国で聖なる娘として、私と世界をつなぐ架け橋となり、また、世界を愛し世界に愛される、そんな存在であるはずでした」

「うとうと語られる言葉は、静かに響き渡る。ふと苦しげな風情な男たちをみれば、意味を理解しているのかこやつの声に耳を傾けているようにもみえた。

「はず、であつた娘たちは、けれど、誰一人として最後まで聖女として生を全うすることができませんでした」

びくり、と、男たちの方が揺れる。はじかれるように顔をあげた神職らしき男の表情が、愕然とした色を浮かべる。そんなはずはない、とでも言いたげな様子で口を開くけれども、負荷は強いらしく、言葉を発することができないようだつた。

「愛し愛され、そうであった一部の娘たちは幸いでした。　たとえ聖女としての力はなくとも、愛を知ることができ幸せに生きるところができたのですから。けれど、それは、ほんの、ほんの一部にすぎなかつたのです」

しん、と、室内の空気が冷える。冷気が、漂つ。研ぎ澄ませた空気は、行き過ぎると人には毒となつてしまつ。胸の奥が痛むようで、大きく息を吸つ。まつたく、ふざけるでない。話を聞く氣はあるが、こつちに被害は「」免こうむる。行儀が悪いが、足を延ばしてこやつの脛あたりを蹴り飛ばす。

「……つ、愛が痛いです」

そんなもの、どこにもないに決まつとひつ。

しかしその一撃で、いくらか空気が緩む。氣を取り直したよつて、こやつは再び言葉を紡ぎ始める。

「どこで間違つたのか。おそらく、愛し愛された娘たちの多くが、王族に嫁したことが原因でしょつか。ある時期、この世界へ来た聖女は、いえ、言い直しましょ、聖女候補は、連續して何代も、この国の王族、主に王となるべきものと愛し合つたのです。　それが、不幸の始まりでした。それ以前には、もちろん、聖女として人生をひつそりと全うした者たちもいたのです。召喚の際に王城ではない場所にうまく落ちることにできた娘や、王城に落ちてもひつそりと生きて行けた娘も。しかし、その、何代も続いた婚姻は、ひとつ間違つた認識を人々に植え付けてしまつた。つまりは、聖なる乙女を妻としたものが王となる。聖なる乙女を妻とすれば国が栄え

る、という、認識を「

「ふむ。しかし、実際に国は栄えたのであるつ?」

「ええ。ですがそれは、娘たちの持ち込んだ、異世界の知識によるもの。若い娘の知識ですので拙くはあれども、王宮には優秀な者たちもいます。気づきませんでしたが。この世界、文化は中世レベルであるのに、水道や下水の設備、入浴設備が整っているということに」

「言われてみれば、何気なく日々使っていた生活設備は、元の世界ほどのいいものではなかつたが、酷く不快であつたり不便であつたりするものではなかつた。つまり、文化が、知識が持ち込まれていた。それ故に国が栄えたのであり、聖女であつたからではないのだ、といつこと。」

「言葉もなく青ざめる周囲の男たちの存在など知らぬげに、こやつは語り続ける。

「本来、聖女の役割は愛を受けること、そしてそれを受け流すこと。聖女を通して流れた愛は世界を巡り、世界を満たす。聖女は愛を受けても受け取つてはならないものなのです。受け取つてしまえば、世界は滞り、災害が増える。災害が増えないように、酷くなる前にとこれはと見込んだ娘たちを聖女候補として送り込んできたのですが……その、最初の過ちのせいでの、すべてが狂い始めたのです。愛し愛された娘たちならば、まだ、よかつた。受け取つてしまつただけならば、よかつた。けれど 無理に愛を強要された娘たちは、世界を呪い人を呪い、大地を呪つた。 聖女は、失われていつたのです」

「……××、×、×××?...」

掠れ振り絞るような声が、悲鳴のよじに上がる。神職らしき男が、何やらをこいつたようだ。それにこやつは強く眉を寄せると、振り払つように手を振る。

あがる悲鳴。そのまま頬れる神職らしき男を、隣にいた王が支える。「何度も伝えよじしました。強要してはならぬ、聖女をけがしてはならぬ、と。それを曲解し捻じ曲げてきたのは、あなたたち神に仕えると名乗る者たちの仕業ではないですか。そのくせ、これ以上に何をもとめるといつのです」

ふう、と、妙に人間臭く息をついた男は、ビニからか取り出した椅子へとゆつたりと腰を下ろす。

「聖女候補だつた娘たちが発した穢れは、大地を世界を　そして、私をむしばみました。おかげで少々、神としてはよろしくない方向に変化を遂げてしまいましてね。実は、今回失敗すると墮天確定なのですよ」

やれやれと告げる男の言葉に、呆れる。なるほどあの変態つぶりはその影響か、しかし酷い影響もあつたものだ、としみじみ思つていれば、自称神が輝かんばかりの笑顔をこぢらに向けた。

「いやですよ、変態だなんて。少し特殊なだけで輝かしい個性なんです」

そんな個性認めるつもりは毛頭ない。むしろそれを個性だと言い張るならば個性に頭を下げて謝るがいい。

「まあ、そんなわけで。今回、あなたをこの世界に送り込んだのは、この世界で愛をひたすらに受け取りひたすらに受け流していただきたかったからであり、あなたならば多少の強引なあれこれも見事スルーするであろうとの予測の元の行動でありましたし、確かに降臨させる前、させた後に、穢すべからずと強く強く宣託しておいたはずなのですが、これっぽっちも伝わってませんでした。なんというか、もうこのまま墮天したほうが私的には幸せなのではないかと思つたりもするのですが、いかがでしょう？」

しらんがな。

にこやかな自称神に対して、周囲の責めつぶりは、顔色が土氣色になるほどだつた。そらそだわな、神が世界を見捨てるといつているのである。落ち着けるわけもなかろう。

「見捨てるのはたやすからうが。むへ、びうしたら納得がいくかね」

このままというのも自覚めが悪い。否、放置したところで何ら関係のない世界の連中なのだが、あの世話になつた娘たちが不幸になるのは見たくないようと思う。基本、人のことなどどうでもいい方なのだが、あの娘たちの働きつぶりや世話は素晴らしいものだったからな、うむ。

「そうですねえ。じゃあ、いひしましょ」

そういうと、するりと自称神、もう認めてやることにするが、神は手を揺らし、あたりにリン、と、重い鈴の音が響き渡る。ぐらりと大気が揺れて、どこか重苦しい、黒い何かが、そこからジワリと広がり目の前の男たちへ、そして周囲へ、さらには世界へと広がつて

いく。

……なんぞこれは、まがまがしい。

「とりあえず、世界にひとつ呪いの枷をかけました。この呪いは、あなたが聖女として全うされない限り、解けません。貴方が穢されたとき、完成します」

神の癖に呪いとは。否、神は祟るといつから、おかしなことではないのか？

「お手軽便利ですよね、黒魔術。」

「ひとつ聞きたいのだが、お前すでに墮ちてないか？」

「いやですね、まだぎりぎりセーフですよ。最後の最後のラインで踏ん張つている感じです。ああ、でも、あなたと一緒に墮ちるのもやぶさかではありません」

とろりととける視線を向けたまま、神が告げる。まで、こやつは、今までの聖女候補の垂れ流した呪詛を受けて墮天しかかつたところに、新たな聖女候補として転生させた私が、人生をかけて受け流してきた愛の成分を受け取った、と。本来それは、今までの話からすれば浄化にむかうはずなのだが、どこかでねじまがつてしまつたよつである。

背筋に悪寒が走る。今まで感じていた、嫌悪や軽蔑ではなく、それは、純粹なる恐怖。

とろり、と、蕩ける表情の神は、静かに言葉を紡ぐ。

「二人は巡り合つたために生まれてきた……違いますか？　あなたは私のために存在する。聖なる娘よ、これからも私のために愛を紡いでください。そして、世界に愛を満たしてください」

いつのまにか、重苦しい気配は取り除かれ、周囲にいた男たちは、綺麗に膝をつき頭を下げている。

向けられる視線は期待、懇願、そして　熱望。

「はあ……生まれ変わつてこんなことになるとはねえ。どうせ、迷われられんのだろ？」「

返されるのは輝く笑顔。

「強固な貞操観念と、色恋に惑わされぬ精神年齢、か。なるほど、選ばれた理由も納得できた。仕方あるまい、ただ、この世界で生きればいいのであれば、生きて行ってやろ？よ。それしか、せぬがな」  
転生してしまったものはしあがない。生きている以上、理由など関係なく生きていぐ、それが我が信条でもあることだしな。妥協と諦念は、悪いものでもないのだよ。生きていくうえで、これほど素晴らしいものはない、そう思つていてる。深くため息を漏らせば、目の前の神を名乗る男は、低く声を漏らし嬉しそうに笑つたのだった。

こつして、世界は平和を取り戻す。まわりまわる世界は、静かに歪みながらも、平衡を保ち続ける。

世界を支えるのは、一人の聖女。彼女はただ、愛を受け愛を受け流し、今日も異世界の空に生きるのだった。

「……一緒に墮天してしまえば、一人きりになれますよ」

「断るに決まつておるうが」

日々は変わりなく、いびつながらも流れゆくのだった。

fin

## 1・手をつけないだ。きみに一步近づけた気がした。

今年のクリスマスは雪になるらしい。

本當になるかどうかすらわからないそんなフレーズを、毎年聞いているような気がするのは気のせいだらうか。

天氣予報では雪、ホワイトクリスマスだという今年、さてどうのよう過ごそうか、と、窓の外を眺める。ホワイトクリスマスをありがたがる風潮というのもよくわからない。が、お祭りごとは嫌いではない。むしろ大好きだ。それを考えれば、雪のクリスマスはなかなかにいい。学生時代、夏のクリスマスを体験したいという友人に連れられ、ふらりと飛び回り南半球まで出向いたのは、懐かしい思い出だ。思えばお祭り好きの根っこは、この友人に引きずられるつちに作られたような気もしないでもない。

その友人は最近、世界を飛び回っていた生活から、日本に根を下ろしたようだ。なんでも誰ぞ同級生と引っ付いたとか引っ付かないとか噂は事欠かない男なのだが、先日の同窓会で聞いたような気もする。

久しぶりに参加した同窓会は、どこかよそよそしいようでしかしながら、我らが世代にお祭り好きやらとんでもないのがそろっていたせいか、割と楽しく参加することができた。「あの」先輩、と、冠が付くのは、かの友人のせいであり、自分個人のせいではないと、声を大にしたいところだが、さて、どんなものだらうか。

ふむ、と、カレンダーを眺める。

同窓会、とこえぱ。

そうだ、と、不意に思い出し、携帯を取り出す。しばし考えていくつか打ち込んだ言葉短い言葉を、わざとメールする。

せつかくだ。彼女に会いに行こう。

先日の同窓会で、久しぶりに会って、懐かしさといろいろな感情で押せ押せののち、アドレス交換することができた、後輩の顔を思い出し、笑みが浮かんだ。

「うわ、思い出し笑いですか、しゅーん

「余計なこといふな。ほら、終わったのか修正」

「いて、まだです、すぐやりますって、もー横暴だなー」

目の前で書類の微修正をかけていた部下の言葉に軽く拳骨をくれてやれば、携帯が震える。ぶーぶー文句を言つ、それこそ違つた意味でお祭り男、ついでに言えばクリスマスに浮かれまくりで相手探しで合コン三昧らしい直属の部下の声を無視して、メールの画面に映る彼女の返事に、思わず笑いを漏らしながら、再び仕事に戻るのだった。

「もー、先輩！ 意味不明すぎますよー」

待ち合わせの場所でのんびりとライトアップされた木を眺めていれば、息を切らせて走ってきたらしき彼女が、そのままの勢いで叫ぶ。

「ああ。……」「めん?」

「つて、なんで語尾が疑問形ですか。なんですかそれは、もうもう  
もうーー。『飯。19時』つて、なんですかあれば！ 用事があつ  
たひどひするんですか、来なかつたらひどひするんですかー！ もう  
！」

「あー、来なかつたら？ 家に帰る？」  
「いいい、ヒ、まるで子ザルのように暴れる彼女は、はたしてもう成人すぎて四捨五入でアラサーよりとはこれっぽっちも思えない。小柄なせいか、全身でじたばた暴れる様は、まるで子供のようだ。

相変わらず見飽きない生き物だと思つてしまひ眺めていれば、満足したのか、否、諦めたのか、大きく息をついて、それから、少しばかり身長が高いがゆえに小さ目の彼女からはかなり上の一にあるこちらの顔を、にんまりとした笑顔で見上げながら、首を傾げた。

「まあ、あれですよ。急な呼び出しだったけど、許して差し上げます！ ということで、『ご飯、もつちりんお』つですよみねー。あーおっなかすいたなーっ」

にっこりと笑いながら、ご飯を連呼する後輩は、もしかせすとも

こちらのことを、便利なお財布とでもおもつて居るのか。いや、それよりはまだらかといつと、おいしいものを食べさせてくれる存在、といつといひか。まあ、飯で呼び出したのはこちらなので、仕方がないか、と、苦笑いを浮かべつつ、そつと手を差し出してみた。

「……なんですか、この手」

じと、じと、その手を睨み付けつつ、彼女が言つ。

「寒いし、君小さいくから。迷子なっちゃダメでしょ。だから、手」  
「もおおおお！ 子供じゃないんですから！ 子供じゃないんです  
からあああ！」

きい、と、彼女が牙をむく。威嚇する子猫のようだ。うん、かわいい。まあまあと宥めつつ、その手を取つて、そのまま自分のコートのポケットへ。田をむいてぱくぱくと口を開け閉めする彼女は、金魚のようで、これもかわいい。

ああそうだ、自分は、あの同窓会の日から、こや、高校生の時に、彼女のあの涙を見た時から、きっと彼女にべたぼれなんだ。

「タルト。好きだろ。おこしことこ、あるから。当然、料理もいけるよ。君向き。一人でおなか一杯」「ース」

その言葉に田の輝きが変わる。つむ、餌付けは有効か。痩せの大食いを地でいく彼女だ、どこに入るのかと不思議なくらいによく食べる。その食べる様も、本当に幸せそうにおいしそうに食べるのだが、これがまた悪くない。だからこそ、あの同窓会の後から時折、こうして呼び出しても来てくれるようになったのだが、毎度毎度おいし

そうに食べる姿をみるのは、たまらなくこちらの癒しもある。このままじわじわとせめて、クリスマスには自宅で手料理でもふるまつてやるうか。それも悪くないかもしないな、なんて思いながら、ポケットの中で握りしめた小さな手の温もりを、そつとかみしめる。

伝わる温もりが、どこか、二人の距離を縮めてくれたようで、思わず緩む顔を引き締めるのに必死だつた。

まだ、ただの先輩、かもしれないけれど。

おいしいごはんを食べさせてくれる存在、でしかないかもしないけれど。

まだまだ、これから、これから。逃がすつもりは、もうないから。

クリスマスまで、あと何日？

## 2・怖がるやつの手を握った、僕の下心をきみは知らない。

「しゅ」「ーん、これ、どうぞー」

「しゅ」と田の前に差し出された一枚のチケットに、驚きつつも田を上げれば、どこかしなりした顔の部下がいた。なんだこれは、と田を戻しそれを手に取れば、映画のチケットである。一体これはなんだ? と視線を向ければ、情けなくまゆを下げて部下は嘆く。

「しゅの前の会「」」で良い感じだった子がいたんですけど、『トーントする予定だったんすけど、振られましたー! 年収が負けてたそうですがー。てなわけで、余っちゃまつたので、これ、どうぞー』

「ふむ。なぜ、俺?」

不思議に思つて問いかければ、しなり顔が一気にニンマリ顔になる。

「だつてしゅにん、最近、良い感じの相手いるっぽこじやなこですかーつ。ぜひぜひ、この映画でも一緒に見て、頑張つてくださいこつ。クリスマスは田前ですよー」

ぐつ、と親指を突き出されたので、それを逆向きに曲げてみる。『やああと大仰に居たがる部下を横田に、ひらりとチケットを握らす。

まあ、もひえるもんはあつがたくもひつておーい。

さて、次会つ日が楽しみだ。

そして。

「…………どおおおしてホラーなんですかあああつ……私がホラー苦手って知ってるでしょ」

映画館の前、すでに涙田の彼女が、場所をわきまえてか、いつもより少しだけ小声で憤慨する。

「…………もうこもんだから？」

「いや、やうですけど、やうですナビ。もおおお、この映画、見るんですか？」

フルフルと震えながらポスターを指さすのと、首を傾げる。

「やめとく？」

ポスターはSFチックな雰囲気でありながら、間違いなくこれはSFホラー系だということを表すかのように、エイリアンらしき生き物が描かれている。彼女は割りとSF好きだったはずだから、これもいけるかとおもったんだが。だめだろうか、と、見つめていれば、がっくりと頃垂れつつ、彼女がつぶやいた。

「見ます。見ますよ、せつかくですもん。みますともー。苦手だけ嫌いじゃないし！ SFだし！ あとと大丈夫、きっと平氣、頑張れ私つ、負けるな私ー！」

ぐぐつと拳を握りこんでそつづぶやく彼女をみながら、しみじみ思

う。これ、持ち帰つちゃダメかなあ。まだむりかなあ、もつちよつとかなあ。つくづくと可愛い生き物だと思うのだけれど、それは俺だけなのだろうか。俺だけだといい。

映画館は割りと空いていた。それはそう、クリスマス前のカツプルとなると、ムードを盛り上げるために恋愛映画か話題の映画となるだろう。この映画は悪くないが、そこまで話題にはなっていない。……しかしあの部下は、なぜこの映画を選んだのか。もしかしてそのせいで振られたんじゃないのかとか、ふと思い至る。まあ、今は彼女を堪能する方が大事だ、と、並んで座った彼女をみやれば、すでにふるふる震えていた。……早くないかちょっと。

暗くなり、予告編が始まる。話題の映画が幾つか流れのを見つつ、次に連れてくるのはもつとベタな恋愛物でもいいかもしない、と思う。あれはれで、面白い。自分とは違う感情の流れを見せる男女を眺めるのも悪くない。つむ、と、考えていれば、本編が始まつた。なるほど、話題の映画とまではいかないが、なかなかのSFX技術であり、見てて飽きない。怖がついていた彼女も、引き込まれるように画面をみている。おお、光が反射して目がきらきらしてる。画面と彼女と、半々で眺めながら、ストーリーが進んだ時、それは起つた。

「ひつ」

突然現れたエイリアンに、彼女が悲鳴を上げる。内容としてはB級な展開なのだが、どうやらダメらしい、必死で声を抑えつつ、画面をみている。見なければよさそうなものだが、どうやら田を離すのも怖いらしい。小さく体をこわばらせ縮こまりながらも画面を見つめる彼女に、ふ、と、思いついて手を伸ばす。

「ハハハ…」

手を握れば、かなり驚かせてしまつたようで椅子の上で跳ね上がり。……おもしろいなあ、などと、少々ひどい事を考えつつ、こちらを涙目で見る彼女の耳元にそそつと唇を寄せて、声を潜めて囁く。

「手。つないでたら、安心でしょ」

その前につなぐ瞬間にびっくりしましたよううとか、何やらブツブツいっていいたようだが、再び画面が緊張感あふれるシーンになると、握る手にぎゅっと力がこもる。ブルブルふるえるさまが可愛らしい。さつき向けられた涙目もたまらない。このチケットをくれた部下の顔を思い出し、いい仕事をしたと内心で褒めてやる。なるほど、これを狙つていたか。あざといこと言つたが、通常であればいまいちな手だが、今回はよくやつたとしかいこよつがない。

つながる手が、温かい。ふるえる彼女が、愛おしい。ここが映画館でなければ、後ろから抱きしめながら見るのも悪くはない。そのままいやいや、落ち着け俺。美味しくいただくな、もう少し先だ。ふるふると震え、時折ぴきや、とばかりに飛び上がる彼女と、どこかコメディの要素すら見せ始めた映画を眺めながら、そつと下心を押し隠した。今はまだ、早い、と。

「あー……怖かつたあ……」

映画館を出て、しみじみという彼女に首を傾げる。いや、確かにホラー要素はあつたが、SF要素とコメディ要素のほつが強かつた気がしないでもない。

「 セーフ？」

首を傾げれば、強くうなづかれる。

「 そうです！ 私、ほんとにダメなんですよ。リアルに想像しちゃうから。あー、今夜寝れるかなあ私」

しょんぼりとうなだれる彼女と、実はまだ手をつないだまま。映画館を出るときに、手を引いてそのまま。彼女は、気づいてないのか気にしていないのか、その手をふんぶんと振った。

「 ね、先輩、ご飯いきましょ、ご飯。今日はラーメンな気分です！」

先ほどまでのしょんぼりはピリリ行つたのか、といつ風情で笑いかける彼女に、ほほ笑み返す。

「 ん。しお？」

「 今日はぱりつと豚骨でー、唐ねばいましょ、唐ねばーーー。」

かなりがつつい膝骨氣分らしく、濃厚な店をあげる彼女に頷いて、連れ立つて歩き出す。

さて、次はどんな手でーいか。

カウントダウンは、もう始まっている。

### 3・放課後の教室は少し寒くて、みんなの手はこんなにも温かい。

手をつなぐ。最近は割りとスムーズに出来るようになったこの行為だけれど、果たして再開前、一番最初にこの手に触れたのはいつだつたか、と、記憶をたどる。ほんやりと浮かぶ情景は、放課後の図書室、茜色に照らされた、冬服の自分たちの姿。ああ、あれはいつだつたか。たしかあれは、高校2年か、3年か。おそらく3年の、冬を目の前にした頃のことだった。

なんとなくつるむようになつた友人と、なんとなく図書室に入り浸るようになつて、なんとなくつるむメンバーが決まっていく。全員が委員会やら固定した何かに所属していたわけではないけれど、そこらの文化部の幽霊部員たよりは密な付き合いをしていと自負する、あの頃。その日も、図書室のメンバーは相変わらずで、じやまにならない端に居場所を定め、皆勝手に本を読んでいたり、ゲームを持ち込んで遊んでいたり、何やらだべつていたり書いていたり、さまざまだった。

「そういうや、今度は遊びこつてたんだ」

そういうえば久しぶりに顔をみた、聞けば先日来学校を休んでいたらしき友人に問い合わせれば、こちらを見ながら彼はメガネを上げた。

「ん、南のほう。寒くなるからと思つたけどまだ早かった」

果たしてその南が、どのあたりやら。よくのせられて、学校登校途中に思い立つた友人に誘われるまま、海を見にいくなんて真似をしていたが、さすがに3年になると自己尊重を始める。内申点つてやつ

が、多少なりとも気になるお年ごろだからだ。けれど、彼はそれをこれっぽっちも気にしない。そんな自由さに、次第に周囲もなれたが、教師はそうもないらしく、色々と彼は目を付けられている様子でもあり、しかしながらその豪胆さから一部の教師には気に入られているという、なんとも不思議な存在だった。そいつの友人筆頭格ということで、色々とこちらも言われるが、まあ、必要最小限受け止めてあとは受け流す方向で、平和になんとかやっていた。

「南かあ、これから寒くなりますしねえ」

窓の外の紅葉を見つめながら、本を読みふけっているとばかり思っていた後輩の一人が呟く。その声に、友人がわずかに口元をほころばせるのはいつものこと。さて、こいつらはお互いにわかってるんだろうかと、しみじみ眺めてると、きやつきやと数名で雑誌を覗き込んでいた、このグループの中では割りと普通に属する系統の子たちのうちの一人である彼女が、会話を耳にしてかこちらに駆け寄ってきた。なんというか、子犬のような子だな、と眺めていれば、駆け寄つたままの勢いで、こちらに詰め寄つてくる。

「先輩先輩つ、もうすぐクリスマスですよ！ どつかいいとこ知りませんか！？」

こちらに詰め寄つてきていたが、その質問は自分よりも友人に向けたほうがいいのではないだろうか。首をかしげ視線を友人に向ければ、薄く苦笑いするのがみえた。

つられるように友人に視線を向けた彼女に、友人はひとつうなづくと、窓へと視線を向ける。

「あそこ。あの山、クリスマス近くになると、綺麗にライトアップさ

れるでしょ。山がクリスマスツリーみたいに。クリスマスの日は、山の頂上付近をライトアップして、かなり良い感じになるらしいよ。標高も地上よりは高いから、ホワイトクリスマスになる可能性もあるし。まあ、かなり寒いけどね

なるほど、近くにあるあの山は、この辺の学生であれば一度以上は登山などの行事でいったことはあるだろ？が、そういうイベントでいったことはない。

「三ですか。夜ですよねえ。うう、厳しいなあ。でも行きたいなあ」

うーうー、と唸るよしひに亥く彼女に、口をついて出しちこなったのは、一緒にいく？ という言葉。だけど、高校生の身分で夜中の外出はまだ厳しく、そもそもクリスマスに誘いをかけるほど親しくはない。その言葉を飲み込めば、彼女が諦めたよしひづぶやいた。

「うー、オトナになるまで我慢しますー。いつか、大人になつて彼氏に連れてつてもらうんだ！」

ぐつと拳を握る彼女を、無意識に見つめていれば、はつと何かに気づいたように顔をあげる。内心びくじと驚いていれば、まゆがそのままくちゅりと下がる。

「あうー、宿題教室に忘れたことに今、この瞬間！ 気づいてしまいましたー。私はこれより、教室に寄ります。そんで時間も時間なので、このまま退散しますですー」

へちょりまゆの横に敬礼のポーズをとり、ではと頭を下げる友人のもとに向かう彼女を、ほんやりと見送る。

何事か友人に声をかけ、カバンを手に図書室を出でいく彼女を見ていると、脇を肘でつつかれた。

見れば、我が友がこちらを見ている。

「何」

「いけよ。何もないとは思つが、何もないとはいえないだろ」

確かに、すでに生徒の数も少ない教室棟だ。ふむ、一理ある、と、頷いて、カバンを手に図書室を出る。

さよならー、とかけられる声にお先に、と返し、友には一度手を振つて、教室棟へと急いで向かう。確か彼女は一つ下、ならばと当たりをつけて急ぎ足で向かえば、ラッキーなことに一つ目の教室で彼女を発見することができた。

がらりと開いた扉の音にびくうう！ と、リアルに飛び跳ねたよう見えた彼女は、こちらをみて、ほつとしたように息をついた。

「なんだあ、先輩ですか。びっくりしましたよーもうう。つていうか、どうしたんですか？」

きょとん、といひを見ると、ゆづくりと歩み寄れば、不思議そに首を傾げる。何かざわざわする感情を感じながら、しかしそれをおぐびにもでないよに押さえ込んだ。

「一応、護衛？」

「なぜ疑問形ですかーつ。ていうかもう、先輩たちって不思議さん

あざむ……」

ふるふると首を振り、机から取り出したらしきノートをカバンに収めた彼女は、ふう、と息をつくと、こちらを見て笑った。

「でも、ありがとうございます。もう、あれですよ、図書館メンバーの先輩方、地味に紳士過ぎて、惚れそうですよ！」

惚れてくれればいいのに、と、思ったのは秘密の話。けれど、誤魔化すように手を差し出せば、再びもよどんとこちらを見る彼女。

「帰るよ。手」

「は？　え？」

突然のことには然としている彼女の手を、割りと強引に取れば、わたくわたくとカバンを手に椅子を戻しはじめる。それを見やつてから、手を引いて歩き出す。

「あ、あの？　先輩？」

手とこちらを両方交互に見つめながら、けれど手を振り払うことなく戸惑いつつも後をついてくる彼女に、じわりと自分の耳が赤くなっているのがわかる。何をしてるのか、と、自分でも思いつつ、しかししながら手から伝わる熱が暖かくて、離したくなくて、黙つたまま歩く。しばらくして人の声が聞こえるまで、無言のまま、彼女の手を引いて歩いた、そんな遠き日の思い出。

そうか、あの時から、自分はもう彼女に惹かれていたのかも知れない。ふと、隣に並んで歩いている彼女を見下ろせば、不思議そうにこちらを見上げてくる。

「なんですかー、先輩っ？」

あの頃は、制服姿で、長い髪を一つ結びにしていた。今は、肩までの長さの髪をゆるく流し、社会人らしい服装でこちらを見上げている。本気で落ちたのはそのあと、かもしれないけれど。間違いなく自分は、最初から彼女が気になっていたらしい。

誤魔化すよつに視線をずらし、遠くに見えるライトアップされた山をみあげる。あの山は、毎年こつしてライトアップされる。そして、クリスマスの日も。

「クリスマス。山、こいつか」

「え、山ですか！ クリスマスっていえば、ライトアップされてきれいなんでしたっけ？ うつわ、行きたいです、ぜひ行きましょう！」

楽しそうに答えて、つないだままの手をブンブンと振る彼女が、あまりにも可愛くて。

「ねえ

そつと呼びかける。

「はい……っ？」

不思議そつに首をかしげて見上げてきた彼女に、少しだけ屈んで、唇に小さなキスをひとつ。

גְּדוּלָה מְלָאָה

.....  
? ! ? ! ?

声にならない声を上げ、ぱくぱくと唇を開け閉めする彼女に、そう告げる。真っ赤になつた顔も、うろたえた顔も、たまらなく可愛くて愛しくて。気がつけば、満面の笑みでほほ笑んでいた。

「せんぱいいいい」

情けない声を上げる彼女の頭を、つないだ手とは逆の手でぽんぽんとたたけば、ますますまゆがへちょりと下がる。ああ、もう、お持ち帰りしたくてしかたがないんだけれど。味見で我慢した自分を、褒めて欲しい。

「ご飯。和洋？」

さり気なく問えば、むううつ、と一度きつくまゆを寄せてから、深い深い溜息一つ漏らして、彼女がびし、っと人差し指を立てた。

「和で！ つていうか、あそこ、炉端焼きの店！ あそこで山芋鉄板と、魚のいいやつ焼いたのと、最後は雑炊でしめるんですつ！ 日本酒も、いいの飲んじゃいますからねつ！！」

その指で「ひらり」をわざないと「ひらり」がしつけがいいといつべきか。

「了解」

一つ頷いて、彼女の手を引いて、ゆっくりと夜の街を歩いてゆく。

願わくば、ずっとこういうでありますよ!!。

そう、静かに願いながら。

あと少し、あと少し。

クリスマスは、もう目の前。

#### 4・ひとつじてと微笑つかの、震える手を離すものか。

クリスマスイブである。勝負の日である。寸前まで浮かれていた部下は、結局お相手にドタキヤンされたとかで、なにやらどんよりとこちらを見ているようだが、とりあえず無視だ。こちらは今日、勝負をかけるのだ。少々お約束すぎて妙に照れる気がするのは、なぜなのだろうか。過去をさかのぼって、ここまで眞面目にクリスマスというものに向き合つたことがあつただろうか。いや、ない。お祭り」とは好きだ、だから騒ぎ倒すことはあつたが、クリスマスとこうの存在にかけたことはないようだ。

だから、余計照れくさいのかもしれない。

窓の外を見れば、薄曇り。ホワイトクリスマスになるのか、それとも、星空のクリスマスイブになるのか。どちらにしても、楽しみだと、薄く笑つた。

あれから。

こまめに食事に誘い、こまめに手を握つた。……いつ表現すると、何やら自分が変態くさい存在になつたような気分になるが、まあ、それだけこまめにアプローチしたことだろう。それに対してのレスポンスは、多少彼女の拳動が不審になつたり、顔を赤らめてくれることがまれにあつたり、といつたところである。まあ、

手をつなぐことに慣れすぎてそれでは顔を赤らめてくれなくなつたのは、いいことなかわるいことなのか。いや、手をつなぐ事すらできなかつたらそれ以上にはすすめないのだからとそこまで考えたところで、仕事中であることに思い至り、とりあえず思考を停止する。

「しゅ」ーん、顔がやにせがつてましたよ。えつちー」

余計なお世話である。手に持っていた書類で部下の頭をひとつたたいて、ぶーぶー文句をこつ部下をそのままに、仕事に集中した。

決戦は、仕事終わりからである。

「おつまたせしましたーつ。せんぱいっ」

息を切らせず、マフラーを巻いた彼女が、白い息を吐きながら駆け寄ってくる。微妙に色合いがクリスマスの配色のような今日の格好に、少し驚いてしみじみ眺めれば、むふふ、と彼女は笑つてそこで一度回る。

「どーですか、クリスマスバージョンな私っ」

「うふ。かわいい」

「ちよ、ま、せんぱい、それはストレーーすがる」

ひやあ、と手袋をした手を頬にあてる彼女の顔が、赤く染まる。うん、かわいい。きっと今、人には見られないほどだらしない顔になつているに違いない。でもいいんだ。かわいいんだから。そう内心で呟きながら、手を差し出す。

「こーじー。」

ひとつ頷いて、素直に手を取る彼女に、湧き上がる嬉しさはどう表現したらいいんだろうか。もうすぐ、もう少し。きっと彼女を手に入れる、と、心に誓いながら、ゆっくりと山へと向かった。

山へは電車とバスで行く。もちろん、車でもいいのだが、この田に車をだすなど野暮すぎる。どこぞに連れ込むのであれば別だが、帰りはタクシーで我が家直行、これで決定なのである。彼女の了承は今のところないが、それはそれとして。山のふもとへのバスは、カツプルだけではなく親子連れもいた。キヤツキヤとはしゃいでは親にいさめられている様子をみて、彼女が小さく笑った。その目が優しくて、やわらかくて。ふと、遠いあの日、完全に彼女に落ちた時のこと、思い出した。

「……ひとりに、してください」

夕暮れの教室で、震えながら、涙を零すまいと唇をかみしめ、それでも、こわばつた笑顔を浮かべた彼女の姿。遠くから聞こえる部活の声と、少し肌寒い教室の気温と。打ち捨てられた小さなノート。ささいな、ささいな食い違いが友達同士で起こったとき、彼女はあいだにはさまれた。そして、その両方を何とかしようと、奮闘したにもかかわらず、今度は両方から彼女が攻撃された。些細な食い違いと、些細な擦れ違い。言つてしまえばそれだけのことなのだけれど、それでも彼女は笑つて、両方をつなげた。つなげうとした。

彼女は、笑顔だった。いつも、いつも笑顔だった。けれど。

無言のまま彼女に歩み寄り、思わず抱きしめかけてとどまる。そし

て、彼女の手を、握る。びくりと震える彼女が逃れようと手を引くのを、少しばかりの強引さで留めて、ただ、握りしめる。

「君は、悪くない。君は、頑張った」

こんな時、上手い言葉の出てこない自分が、悔しい。ただ、それだけしか言葉にならなくて、それだけを繰り返していれば、彼女がしゃくりあげ、やがてぽろぽろと頬を涙が伝いおちる。次から次に、頬を伝い流れる涙を見つめて、その涙を拭うことができればと願いながら、けれど、ただじつと手を握り続けた。

### 遠い遠い、昔の記憶。

バスから降りれば、すでに山のふもとで。間近で見上げる山は、美しくライトアップされていた。

ここからはケーブルと、スロープカーでのぼることになる。歩くのも悪くはないが、今日は無しだ。手を取り特別に夜間運行されるそれに、乗り込んだ。

よくある100万ドルの夜景、と、名づけられた風景が、眼下に広がる。工場地帯のこのエリアが、自分と彼女が生まれ育った町。少しばかり古臭くて、少しばかり暖かい。そんな街を眺めながら、同じように下を見つめる彼女に視線を移す。ともにある存在。ともにあってほしい存在。一度離れたけれど、あの同窓会で会った時から、

狙い定めて今日まで来た。

逃がしてあげるつもりはない。涙を一人で流すことなどないようこそ、元気だ。

無言のまま風景を眺め、スロープカーに乗り換える。ゆっくりと登るうちに、頂上のライトアップが次第に近くなつていぐ。せりせり、せらせらと光がふりまかれ、それが彼女の顔に反射する。

たどり着いた頂上で、皆が下りていぐの後ろ、最後から、ゆっくりと展望台方面へと進む。きやあきやあとはしゃぎながら眺める人々、寒さに寄り添つて眺める人々の群れをみながら、彼女の手を引いて、ゆっくりと、進む。

「……ねえ」

「なんですか、せんぱい」

きょとん、と、見上げる彼女に、ほほ笑みかける。

「好きなんだけど。付き合って」

「つー、つー、せ、せ、せんぱいっ？」

一気に真っ赤になつた彼女を、眺めながら、ゆっくりと夜景が見渡せる場所へと向かつ。あつあつと言葉にならない言葉を漏らす彼女の背に手をあてて、ほら、と、促せば、一気に彼女の表情が変わつた。

「う、わあ。ライトアップつて頂上だけじゃないんだ」

山のいたるところ、「きらきら」と光がちりばめられている。眼下の夜景と相まって、幻想的な風景となつたそれは、山の上の寒い空氣の中で、この上なく、きらきらと、きらきらと輝いてみえた。

無言のまま、二人で、その風景を見つめる。人の声、笑い声、楽しげな叫び、そして、感嘆の声。さまざま人の声を聞きながら、二人、ただ無言で、その風景を見つめ続ける。

ふと、彼女が、見上げるように視線をこちらに向ける。  
なに？ と首を傾げれば、ふ、と、彼女が柔らかな蕩けるような笑顔を見せた。

「仕方がないから、付き合つてあげますよつ、せんぱいっ」

言葉とは裏腹に、彼女の顔は真つ赤で。目は潤んでいて。ああ、かわいいなあ、と、衝動のまま、背後から抱きしめる。

ぎや、と、声をあげるのに小さく笑いながら、そつと耳元で、囁いた。

「メリークリスマス」

ずっと笑っていて。どうかもう、一人で泣かないで。そう、願いながら、やっと抱きしめることができたことが、幸せだった。

「メリークリスマス、です」

やつと、この手の中へ、彼女をつかんだ夜のお話。

## 5・僕はただきみの手を握って、きみは黙つたまま頷いて。

クリスマスの朝である。

あのあと、彼女を連れて自宅へ帰り、準備してあつた料理やケーキを出して一人で夜を過ごし、ついでに彼女を美味しくいただいて、そして、今、目覚めた腕の中に彼女がいるわけで。そのぬくもりに気づいて、ゆるりと頬が緩む。あえて遮光ではないものを選んだカーテンから差し込む朝日に気づいて目覚めたのがつい先程、それから、腕の中の温もりに気づいて顔を緩めるまでどれほどの時間もなかつただろう。幸いなことに今日は日曜日、どれほど寝坊しようとも仕事に差し支えない。

腕の中、すپすپと心地よさげに寝息を立てる彼女の寝顔を、じつと見つめる。どちらかと言えば全体的に小作りな彼女の顔は、見ていてなぜか飽きない。惚れた欲田というやつだろうか。それならそれで結構、と、しみじみと見つめながら、そういえば、と、サイドテーブルの引き出しへと手を伸ばし、その中にひそませていたものを取り出す。

「……ん」

動く気配を感じたのか、彼女が身じろぎ、小さく声を漏らす。起きるのかな、と、見ていれば、むづ、と一度強く眉を寄せた後、ゆっくりと瞼が開いた。そして、そのままとろとろほほ笑む。

「おはようござれこめ……すうー。」

その笑顔のままで寝ぼけたような声でこいつを始めたが、最後で跳ね起きた。目がまんまるだ。きょろきょろと周囲を見回し、自分の格好を見やり、じぢぢをみやり、ぱくぱくと口を開け閉めし、言葉が出ないのか、両手をぱたぱたと動かして何かを伝えようとしている。

ああ、かわいいなあ。などとずれた感想を浮かべつつ、こいつとほほ笑み返す。

「うわさまでした」

「つ、なんかちつがーーつ……」

その後バタバタと一人暴れる彼女をなだめ、どうどうと落ち着かせてみれば、じうやら羞恥のあまりの行動のようだった。まさか記憶がないのか、と思ったがそうではなくて、ほつとした。 いろんな意味で。

はふう、と、やつと落ち着いて肩を落とす彼女を見つつ、さて、と先ほど引き出しから取り出したものを手の中でもてあそぶ。わかっている、タイミング的に今といつのは微妙だといふことも。だが。

「ねえ。これ

「え、なんです、か？」

不思議そうにふりむいた彼女に、そつと箱を差し出す。小さな小箱。 目を見開き硬直する彼女の手にそれを握らせ、開いて見せる。

小ぶりな透明の宝石のついた、指輪。あえて大きなものにしなかったのは、彼女のイメージからだろうか。もつといい値段のものでもよかつたのだけれど、一眼ぼれして選んだ、今日のための、指輪だ。男一人、宝石店に出向くのは恥ずかしくもあったが、しかし、是非にでも用意したくて、気合で乗り切つた。気持ちが重からうがしつたことではない。ただ、半端な気持ちじやないんだと、伝えたから。もし、気に入らなければ、一緒にまた買いに行けばいい。だからこれは、気持ちの問題なんだ。

「え、せんぱ……」

「傍にいて、欲しいから」

声が出ない様子の彼女に、箱から指輪を取り出し、その薬指にはめる。抵抗しない彼女に、受け入れられているらしいと少し安心する。果然とその所作を見つめていた彼女の顔が、だんだんと赤く染まっていき、その目に涙がたまる。

じつと見つめていれば、視線が絡む。そつと手を握り締める。小さな手。これから守つていいく手。守らせてほしい手。

じつと見つめれば、彼女は、やがてひとつまろりと涙を零して、静かに頷いた。

クリスマスの、朝のことだった。

そして、今、彼女は怒っている。否、拗ねているというか、とにかく

く、ダイニングテーブルの椅子に腰かけて、両手にマグをかかえこんで、頬を膨らませている。うむ、そういう仕草も小動物っぽいのだが、と、声に出せば再び怒らせなことを考えつつ、早く朝食を整える。

あの後、空腹を知らせるお腹の音で彼女は我に返り、自分の置かれた現状に気が付いたらしく。つまり、それなりに綺麗にはしておいたけれど、というやつである。せやああと悲鳴をあげると、ばたばたとシーツを再びひつつかみミノムシのよつに丸まり、ううう、なんてこと… と一人呟くのに、シャワーをすすめる。こちらもシャワーを浴びたいところだが、とりあえず、と朝食の用意をはじめ、彼女が驚くほどのスピードで上がってきた後、交代でざつとシャワーを浴びて戻れば、身支度を整えた彼女が、頬を膨らませてダイニングにいたわけで。

とりあえずご機嫌を取るために、ミルクたっぷりのカフェオレを渡せば、一瞬頬が緩んだものの再びぷっくりと膨れ上がる。やれやれご機嫌斜めのようだ、と、まずは彼女のおなかをなだめるために、朝食を作る。ふわりと漂ういい香りにちらり、ちらりと彼女がこちらを見るのがわかり、笑いが漏れそうになるがここで笑うと余計ご機嫌を損ねてしまうから我慢である。

やがて出来上がった料理を彼女の前に出せば、その顔が輝く。

「いっただきますっ！」

先ほどの不機嫌はどこへやら、『機嫌な様子で食べ始めるのに満足感を覚えながら自分も食事をとり始めれば、じつとこちらを見る彼女の視線。首を傾げれば、むづ、と、眉を寄せる彼女の姿。

「どうした？」

「料理は上手いし、稼ぎはいいし、なんかくやしーんですけど！いいですか、私だって料理できないわけじゃないんですから。これからきっと頑張ってみせますから！」

びしつ、と手に持ったフォークを天井に向けつつやつらにする彼女に、正直に言おう、脂下がつた顔になってしまったことは否定しない。

「期待している。 奥さん」

一瞬にしてほふんと、まるでマンガのように赤くなつた彼女は、もうもつもつーーー！と、悔しそうに照れながらべしひと、机の隅をたたく。あの状況でプロポーズなんて、とか、もう、とか、料理上手とかずるいー、とか、なにやらもどもそとつぶやいているから、一度首を傾げ、そして、立ち上ると彼女のやばくに向かう。

「ねえ」

声をかければ、はつ、と、一度跳ね上がつたりを見上げる彼女。その隙に、小さなキスをひとつ。

「つせ、せんぱ……つ

「(ノ)飯醒めちやつかひ。あ、あと、愛してゐよ」

「つこじのよひて言わないでええええ」

あつあつあつー、と、くちゅつこまゆをトサて嘆く彼女の頬をさらりと/or、席に戻れば、もうもつもつーー！といながらも、溢れ

るよつに笑つて彼女も食事を再開する。

ずっとずっと、こうして笑つていられればいい。彼女と、そして、  
いざれ生まれくるかもしれない子供と、楽しく笑つていられるひと  
時を持てれば、いい。

簡単なようで大それた思いを静かに胸に抱えて、言葉を交わしながら  
クリスマスの朝ご飯を終えたのだった。

クリスマスイブに捕まえた彼女は、クリスマスに、妻となる人とな  
つた。

そんな、幸せな、クリスマスのお話。

fin.

## 1・林檎の毒に浮かされて

「「「わざんよ。」これから、どうぞよろしくお願ひいたします」

そうじつて一国の王女らしく、優雅な淑女の礼を見せる乙女を、彼は内心苦々しく、しかしながら、外側は穏やかな笑顔を浮かべながら、静かに眺めた。

「よつじや、我が國へ。行き届かぬといふがあるやもしれぬが、心安く過ごされぬよう」

豪奢な謁見の間、王とその傍らに立つ王太子たる彼と、その周囲にはこの場に来ることの許された王の正妃と数多側妃の上位一部、それらに囲まれながらも、乙女はつるたえる様子もなく、嫣然と微笑んでこの場にあつた。

「ありがとうございます」

その言葉を最後に、謁見は終わりをつげ、彼はゆつくりと姫に歩み寄る。向けられる数多の女の視線の、そこに含まれる毒が、どれほどのものなのか。皆が皆、自らの求めるもののために、ただ、彼を邪魔に思つてはいることなど、王とこの姫以外、皆が知つてゐる。そのような場所に、知らぬとはいえ嫁がされるこの姫の、なんと不幸なことか。幸い視線に気づかぬのか、穏やかに微笑んでいるように思えるけれども、これから彼女の身も危うくなりかねない。深く深く漏れかけるため息を必死で抑え込んで、彼は姫へと笑いかける。

「よつじや、姫

差し出した手に重ねられた手は、小さく、そして、細かつた。

……やつぱりあの時、気合で出でいくべきだつただろうか、と、彼はひつそりと心の中で嘆くのだった。

脱走しようとして、飛び出したはいいが、すぐにつかまり、息を切らせながら駆けつけてきた老臣たちに身も背もなく泣きながらすがりつかれて、諦めたのは、記憶に新しい。

この国は、とうに腐っている。いや、何とか老臣たちが老害だのなんだのと陰口をたたかれながらも踏ん張つてあるからこそ、持つているのではないだろうか。物心つく前から気が付けば老人たちに仕込まれ、10の歳には執務を取つていた。今思えば、父が頼りないからこそその決断であり、国のために仕方がなかつたと、わかる。弟やら妹やらがわらわらいる中で、亡くなつた正妃の息子であり一番最初の男子だつたが故の皇太子就任であるためか、また、母を忘れられぬらしき父が正妃をめとらぬゆえか、わらわらいる側妃たちが我こそはと色めき立ち、さらにその息子たちが、あとにわらわらと控えている。皆が皆愚かであるわけではないけれども、その母は文字通り、子供たちが大事で愛しいらしく、手を変え品を変え、こちらの命を飽きもせず狙い、さらにそれを王は気づきもせず進言しても妃たちを愛しているのかなんなのか、かばうばかりで改善もなし、そんな毎日の中逃げ出したくなつたところで何ら罪などないだろ。結局は逃げられなかつたが。

そして今回、大国とは言えぬが、かなり由緒のある隣国より、かの国の王族の寵愛深き姫君が、王太子たる彼のもとへと嫁ぐこととなつた。これは、彼の立場をさらに強めることになるであらうし、王

太子たる地位を盤石とするものもあり、後宮の女たちがざわめいているのは、すでにこちらの知るところでもあった。

かの国も、それほど寵愛している姫君であれば、何も我が国に嫁がせることなどないだろ？と思わず愚痴をいいたくなる彼ではあるが、あちらの国からの申し出であり、それを断るだけのものは現在この国はない。突っぱねる意味もなければそのメリットもないが故に、多くの貴族どもは反対もできず、逆に老臣どもはこれを機会により王太子の地位を盤石にさせたいと狙つたようである。しかし、この現状、いつわが身が狙われるかもわからず、ついでに言えば、姫の命すらも狂つた女どもにかかるはどうなるやもわからない。どこまで守れるか、と、いはれそうになる吐息をこらえながら、彼女と共に謁見の間を下がる。

左右に目を走らせれば、自らの子飼いと老臣どもの手のものが、上手く配備されており、背後にはどこからかあらわれた我が側近が、さらには姫の侍女らしき女が控えていた。現状は大丈夫だらうつか、と、思つていれば、田の端に見たことのない影がよぎり、思わず姫の手を引く。さつくか、と、構えれば、その影は何か光るものを持ててこちらに駆け寄つてくる。

「……ひつ」

らじくなく低い舌打ちを漏らせば、周囲の人間があわただしく動く。

と。

「……はあ？」

その男が消えた。否、横から現れた陰に浚われるようにぶつかられ

て、繁みの奥へと姿が見えなくなつた。繁みの向こうからはぐもつたうめき声が聞こえ、やがてそのまま、静かになる。ちらりと視線を向ければ心得た護衛が様子を見に向かう。

「わが君、大丈夫ですわよ」

ふと、聞こえた声にそちらをみれば、彼を静かに見上げる姫の顔があつた。その顔にはどこか楽しげな、悪戯めいた表情が浮かんでいて、場にそぐわぬそれに、彼は戸惑つ。

「ひ、め？」

やがて戻ってきた護衛の傍ら、いつかどこかでみた暗殺者が、これまた黒づくめの暗殺者のような男を引きずつてやってきた。

「……お前は」

「（）無沙汰しておりますよ、王太子さん。こいつ、第5側妃んとの子飼いですよ。あそこはどうにも、財布が乏しいらしく腕が悪いのしかやとえんですからね」

いやそういうことではなく。どうこうことだ、と訝しく睨み付ければ、男は大仰に肩をすくめてみせた。

「雇う金が高くて、肩入れしたい方に鞍替えするのが俺の主義でしてね。とりあえず、とある方と利害が一致したもんで、とりあえずは王太子さん派つづー」とで」

男は引きずつていた男を護衛に渡すと、では、と軽い言葉を残して去つて行つた。

「……どうなつていい」

低く側近に声をかければ、一度頭を下げて周囲の人間に耳打ちし、指示を出していくようだった。わからないまま、そういえば、と、姫をみると、こちらをどこか楽しそうに見つめる姿があった。

何やつ、嫌な予感が、した。

「お待たせして申し訳ない。すぐに部屋にござ内しよう」

振り払つよう一度首を振り、再び姫の手を引き歩みだす。

「おきになさりす。皆様、大事な林檎を守るのに必死なのでしう。そこそこ毒が含まれることなど気づくことないのでしょうか」

くすくす、と、小ちくしゃくされる声と、言葉と。

どうやら、わが姫となる姫は、一筋縄ではないかららしい、と、内心で再びため息をつく彼だった。

……やっぱ家出しつけばよかつた。

## 2・硝子に映える澄んだ白

案内された部屋は、やたらと豪華な部屋だった。無駄に派手派手しい様子は、わが国では見られぬもの、この國の國はどいやう、このよつな裝飾が好まれるらしい。

否。

情報は確かのよつね、と、姫は内心でひつそりと笑う。その笑顔を見咎めてかこちらをみる一人の青年、この國の王太子にしてわが夫となる人物に、何気ないそぶりで笑顔を返した。

また後程に、と挨拶を交わし、静かに退室していったこの國のものたちの姿を見送ると同時に、この部屋付きだと紹介された数名の侍女たちには仕事を言いつけて下がらせる。応接の間の隣、完全な私室となる部屋で、國からついてきた侍女と一人になった姫は、うつそりとほほ笑んだ。

「「この國で、正解だつたようだわ」

しかし、姫の忠実なしもべたる侍女は、その眉を顰めて、首を振る。

「「ど」」がです。あのような公式な場だといつのに、妙に派手派手しくまるで夜会のような、それもど」か品のないほど のドレスをまとつよつな妃たちのいる國ですよ。どれほど後宮が腐っていることか。つけられた侍女たちだつて「ど」まで信頼できるものか

先ほど下がつていった侍女たちの、こちらを品定めするよつな表情を思い浮かべ、再び首を振つて見せれば、姫たる娘はくすくすとど

「までも楽しげに笑い声を零した。

「馬鹿ね。リスクが大きければ大きいほど、戾りは大きいものなのよ」

「ヤリ、と、微笑んだその顔は、悪戯めいた表情でありながら、どこまでも艶やかだった。

この国に嫁ぐ、と決めたのは、姫本人だった。当初、周囲からは寵愛深いが故の反対のほかに、その裏を知ることからの反対も、激しいものだった。

浪費の激しい妃とそれを許す王の国。

唯一国の手綱を握る王太子も、命を狙われる国。

それらの言葉を、姫を愛する国の人々は、直接耳に入れるのははばかりながらも、手を変え品を変え、かの国はやめておけと言葉は違えど皆同じことを告げてきた。けれど、姫は首を振る。かの国へ嫁ぎたい、かの王太子の妃となりたいのです、と、かたくななまでにそう繰り返す姫は、訝しがる周囲に、涙ながらにこう告げたのだ。

かの王太子をお見かけした際、一目で恋に落ちました。

かの方以外に嫁ぐことなど、考えられませぬ。

どうか、どうかわたしをかの国へ嫁がせてくださいませ。

その美しい瞳を涙に潤ませ、震える声で告げるその儂げな様子に、人々は折れた。

王太子個人は悪くないのだ。それに、国自体もまだ悪いものではな

い。ならば、姫の身を守れるだけの配備を行つて嫁がせるしかないではないか。

喜びに頬を染め喜ぶ姫に、王は、そして兄王子たちは、仕方なさげにそう許可をだしたのだった。姫がうつそりと、微笑んでいることなど誰も気づきはしなかった。

もちろん、姫とて何もしなかつたわけではない。ひつそりと変装をし誰にも知られずに下町に出入りすることも多い姫である。そう、彼女を寵愛する周囲の人々は誰もそれを知らない。その下町で、ひたすらに趣味に没頭しつつもかの国情報を集め、噂話を聞いた。彼女が出入りしていた周辺はそれはそれは治安がよろしくない界隈でもあったので、それなりに面白い噂を聞くことができた。

かの国からのがれてきたという一人の男と出会ったのも、そこでのことである。

そして、彼女は着々と、表と裏の両方で準備を整えた。渋る側付きの侍女をなだめながら、無事準備を整え、この国へと乗り込んできたのだった。

そして、そのひとつは早速実を結んだ。なんとまあ、愚かなことだろ。姫の母国たる国は、勢いは強くないが、古くそれなりの安定した国である。その底力たるや、侮れぬものではないだろうに、そこを考えることのできないものがこの国には普通に存在している。なんということとか、と、その状況に憤るのが普通なのだろうが、姫にとつてはそれもひとつ楽しみであり、これからに思いをはせる」と、胸が高鳴る要因でしかない。

幸い、王太子はまとものようで、表面は取り繕つていたが何やら心

労堪えぬ様子、さて、これから行動が彼にとって幸いとなるか、更なる心労のタネとなるか それもまた、楽しみなことだった。

「姫様、お顔が悪くなつておられますよ」

そつと注進に及ぶ侍女の呆れた声にくすりと笑い声を漏らして、姫はゆつくりと、晚餐のための身支度を整えるために侍女に歩み寄る。他のものの手など不要、信頼できる侍女だけがよい、と言えば、むしろそれを王太子は歓迎してくれた。外には信頼できる、ある意味手ごまとなつてくれている騎士たちがいることだろう。なにも心配などない。ただ、望むがまま、自らの求める結果をつかむだけだ。

淡い色のドレスに鮮やかに結い上げた髪に、シンプルながら品のある装飾品で飾り終えた姫は、窓辺へと歩み寄る。磨かれたガラスがきれいにはまる窓に映るは、派手だといって過言ではない部屋の調度の数々。その中に淡い色をまとい白い肌の、姫自身が移る。

「ねえ、酷く派手な部屋だけれど、ある意味では悪くないかもしないわね」

くるりとすそを広げながら振り返れば、呆れつゝもどこか賞賛の色を浮かべた事情が微笑む。

「姫様以上に、素晴らしい方はおられませんから」

くすくすとほほ笑む姫は、そつと窓から離れながら、思考を巡らせる。これからのこと、これまで打つてきた手のこと、そして、夫となる王太子のこと、そのさまざまな要因が入り混じり、将来を予測し最善を割り出していくべく。

外より、晩餐の時間の声がかかる。エスコート役は誰が来るだろう。侍女に促されて、ゆっくりと隣の応接の間となっている部屋へと移動する。

さあ、一世一代の時が始まった。

一と出るか半と出るか。

人生最大の、この賭けだけは、負けられないのだから。

鏡に映るその表情は、白く澄み渡る肌が周囲のちょうどに映えて、どこか儂げであるにもかかわらず、その瞳は楽しげに強い意志を表して、輝いているのだった。

### 3・魅惑の髪に口づけを

「うやうやしい、一筋縄ではいかない人間を、正妃として迎えてしまつたらしい。」

晩餐までの時間、部屋まで姫を送つた彼は、どじまるところを知らず押し寄せる書類と陳情の処理のために、自らの執務室へと戻つた。執務室では、すでに書類が待ち構えており、どこかにこやかな側近が嬉々として整理をはじめる。いつもならばどことなく不機嫌な様子で処理するであろうにその浮かれた様子に気が沈む。それについて言及すれば間違いなく聞きたくないことを聞かされるに違ひない、と、知らぬふりで執務机に向かつ。

とりあえず、今日はもう襲撃はないだろう。そう予測できてしまつ現状にも、では明日はあるかもしないのかと思わざるを得ない現状にも本当にうんざりだつた。ため息と胃痛と、不眠はもう長い。ただでさえ憂鬱な日々だというのに、迎えた姫はどこか怪しい。いや、まだわからないが、少なくとも女性不信どころか人間不信の傾向すらある彼にとつては、頭痛の種に間違いなかつた。

考えれば考えるほどめりこんでいつてそのうち戻れなくなつてしまいそうで、頭を振つて意識を書類に戻す。必要な書類は多い、が、紛れているふざけた書類どもにも苛立ちが募る。これくらいお前らで処理しとけよつていうかなんで俺のところに最終決済王印のいる書類が混じつてるんだ仕事しろよ親父いい……と、内心ではどれほど罵倒しようとただひたすらに手を動かし指示を出す。しなければ埋もれるのだ。しなければ進まないのだ。ああ、何故自分はここにいるのだろう 再びそんな思考の迷宮ことらわれかけながらも、彼はひたすらに執務を進める。

あとに迫る晩餐の時間のことを考えないようとするがためにも、ただひたすらに執務に励むのだった。

しかし、時は人の上に無情にも平等に過ぎない。いかにいやだと考えまいとしたところ、時は進み時間がやつてくる。

「お時間ですみ

語尾が微妙に弾んでるよに聞こえるのは、その顔が意地悪く樂しげに見えるのは、氣のせいなのだろうか、と軽く睨み付けるよに側近を見やれば、笑顔が広がる。そのまま側近は彼を立たせると、身支度をさせるために部屋の移動をはじめ、嫌だいやだと思う間もなく、着替えを終えて姫を迎えて言われる。

いきたくない、と、言えればどれだけ幸せなことか。

唯一救いと思えるのは、部屋に案内した時、調度を見た彼女の表情が一瞬苦く見えたことだろうか。過剰な浪費を好み相手だといい。少なくともほかの、父の妃たちのよにこれでもかと後宮費を使い、さらに裏黒い部分では実家の金を使いまくる連中よりは、多少なりとも質素とは言わぬまでも堅実であってくれればそれでいい。彼の中での希望は、今までの経験で擦り切れどりやうとしてつもなく低いものになってしまったようだった。

姫の部屋は、執務室からは遠い。婚姻の儀式を上げるまでの間は、まだ王太子宮に迎え入れることができず、正宮の後宮とされる区域の中の、王太子の妃たちが集うことになる区画の一部に室を与えら

れる。王の後宮とは庭を同一にするが、それぞれ別となつており、基本的に何らかの行事やなにかがないかぎりは、王太子と言えども王の後宮に入ることはなく、また、王と言えども王太子の後宮に入ることはないようになつていて。

先触れの声を聞きながら、やがてたどり着いた姫の室の扉が開く。扉の両側にこの室付きの侍女たちが見えるが、どうにこころうは王の側妃たちの紐付きであるよう、注意が必要だと報告を受けている。数名その中に、信頼できるものを混ぜてあり、それらをちらりと見やればそつと頷くのが見える。やがて、國より連れてきた侍女に促され、姫が現れる。

ふわりと揺れる金糸の柔らかな髪が、ゆっくりとお辞儀をし、そして顔をあげた。淡い色のドレスをまとうその姿はどこか儂げで、これはこの国で生きていけるのだろうか、といつ思いが、それまで抱いていた印象を押し流す様に湧き上がる。が、顔をあげまっすぐにこちらを向いて微笑む姫の眼を見た瞬間、がらりと印象が変わる。見つめる瞳は、その柔らかく魅惑する髪と肢体の儂さを裏切つて、どこまでも強かに輝いていた。

「お待たせして申し訳ありません。まいりましょ、わが君」

告げられた声に促され、そして手を差し伸べる。重ねられた手は小さいものであつたけれども、恐らく彼女がつかむものはとても大きい。そんな思いにとらわれ、ゆっくりと伴い歩きながら、彼は静かに問いかけた。

「何を、成されますか」

あいまいな問いであり、そもそも姫として生きてきたものに向ける

言葉ではないかもしない。けれど、彼は問わずにはいられなかつた。その彼女の眼に、その光に、その瞬間は確かに魅了されていたのだつた。

くすり、と、楽しげな笑みをこぼした姫は、その顔にどこか悪戯めいた、しかしながらどこまでも果てしなく艶やかで強かな色を浮かべながら、唇を開く。

「何も。ただ、わが君を支え、お力になりましょう」

つられるように彼も小さく笑みをこぼす。支え、力になる、という。この国の現状を、王太子たる彼の状況を理解した上でのその言葉ならば、それは何もなさないことではない。何もかもを覆しかねないという、ことだ。ずきり、と、胃に痛みが走る。いや、現状が改善されるならそれに越したことはないだろう。だが、そうたやすく変わるものではない。むしろこれから、どういう状態になるのか。自分が周囲が無理だつたものを、どうするといふのか。引きつりかけた表情を覆い隠し、それをじまかす様に彼は息をつく。

ゆつくりとほほ笑みあいながら、時折囁きあつよつに身を寄せ合つ姿はあるで髪に口づけすらいるようだ、その歩く一人の姿は、はたから見れば仲睦まじく穏やかな風情で、見送る侍女や従者がほうとため息を漏らす。

「なるほど。では、まずはお手並みを拝見しましょう。 できれば、平穏に」

我ながらそれは無理だとわかりながらも、これ以上の頭痛の種は勘弁してほしいと、彼の本音がちらりとこぼれる。くすりと再び笑い声を漏らした姫は、そつと彼に視線を合わせ、あでやかに微笑んだ。

「危険なくして大きな見返りはありませんわ。わたし、負ける賭けは大嫌いですの」

やがてたどり着いた晩餐の間の前、中にはおそらく、王と出席を許された上位の妃が数名いることだろう。これから的时间を思い、彼は次第に胃の痛みがひどくなってきていくような感覚を覚え、僅かに顔を引きつらせるのだった。

#### 4・狼さんわたしを食べて

きらきらと輝く明かりと、豪奢に飾られた室内には、ひそやかな話し声と小さな笑い声が響いていた。

伴われるまま、開かれた扉から姫と王太子が現れた時、その声は一時、しん、と静まり返る。

如才なく礼を取り王と会話をはじめる王太子の横で、静かに礼を取りほほ笑みながら姫は内心、うつそりとした裏黒い笑みを浮かべる。おやおや、思つた以上に化け猫さんたちがいるようですわ。

絢爛豪華、といえば聞こえはいいものの、これ見よがしに着飾つたそれでは、かなり個人のセンスに左右されるらしく、一人二人を除いては、素材も品もいいはずであるのに、どこか品がなく見えてしまつていた。

「して、どうかな、この国は」

そこまでお年を召していなはずなのに、すでにどこか好々爺然とした王が、にこやかな笑みで姫に声をかける。たおやかに微笑みながら、そつと一度王太子に視線を向け、静かに頭を下げながら、姫は告げる。

「とても素晴らしい国だと思います。　このような素晴らしい日  
那様に嫁げること、嬉しく思いますわ」

瞬間、数名の気配が変わる。裏に秘めたひつそりとしたきもちを、鋭敏に察知したか。それとも、言葉の裏を勝手な妄想で勘ぐつたか。

「これはこれは、旦那様も気が休まらないことだらう。」

「どこか遠くで、勝負開始の合図が響くのを感じて、姫は顔を伏せたまま、笑った。

謁見の間でのあこがれのときにも感じていたが、『うにせの國の王の側妃たちは、少々頭が足りないのではなかろうか、と、見下すつもりはなくとも思わされる。なるほど、これでは次の正妃を側妃から選ばないわけだと、内心で納得し、王太子の隣に用意された席で、語りかけられるまだ当たり障りのない言葉にこたえつつ、そつと王を伺つ。

と、視線が合えば、どこかにんまりとほほ笑む姿。

「おやおや、これは、と、姫は静かに微笑み返す。これはこれは、さすがに一国の王であるだけあって、なかなかのたぬきでいらっしゃるようだ。王太子は氣づいているのかどうかはわからない、が、あの憂鬱つぶりからするに、上手いことじまかされているような気がしないでもない。」

「これは楽しくなつてきましたわ、と、隣でどこか堅い表情の王太子をよそに、姫は楽しげに小さな笑い声を漏らした。

「姫様は、國でさうのよつに過いをねておられましたの？」

静かに繰り出したのは、第三妃だらうか。今日の晩餐には、第一から第三までの妃が出席を許されているようだつた。昼間、こちらに手出しをしてきた第五妃はここに出られる立場ではない。だからこそ焦つたともいえるだらうけれど、と、そのような内心は一つも出さずに、そつと首を傾げて言葉を紡ぐ。

「なにも、ただ、必要なことを学び、必要なことをし、『えられた責務を果たしておりました』

「そうですの。しかし、お国の方もさぞかしさみしい思いをされたでしょ。姫様はとても愛されているという噂でしたから」

くすくすと漏れる笑いに混じるのは、僅かなあざけりだらうか。なるほど、愛されていのにこの国に嫁いだこと、その他もろもろ、国もろとも侮るつもりだらう。そもそもからして、呼びかけが姫様とは、なんとまあ、愚かなことだらうか。

わざと頬を染め、一度ちらりと王太子に視線を向けると、恥ずかしげに眼を伏せる。

「その、わたくしが両親にお願いしましたの。王太子様を心よりお慕いしておりますから、どうぞ嫁がせてくださいませ、と」

まあ、と、大仰にいう第三妃の横で、第一、第一妃の顔色がわずかに変わる。そう、彼女たちは意味を理解したのだらう。隣国より古来ある我が母国の姫であるこの身が、この国に嫁ぐ意味、その理由が王太子である、ということ、その真なる意味は、母国がこの国自体を支持するのではなく、王太子個人を支持するということに、同義となりつる。国と国との関係強化のよつに見えながらも、その実、王太子の後見を強めたこととなり、逆に言えば王太子に何かあれば、

隣国との関係は破たんする。そう、私は寵愛される姫であるのだ。父に、母に、兄たちに愛されている。その姫が、王太子を慕い婚姻を結ぶ。それが壊れた時、では別のものと、と、代わりを差し出されたとてそれはあり得ないのだ。そして、そうするだけの力と縁が、この国からみれば小国のように錯覚されがちなわが国には、しつかりとあるのだ。

「そうですの。王太子殿下は、そのように慕つてくださる王太子妃殿下をお迎えになることができて、幸せでございますわね」

ほほ笑んでそういうのけた第一妃は、さすがと言えばさすがなのだら。引きつりかけているようにみえなくもないけれども、それでもプライドにかけてか、繕いきつてみせた。

「つむ、王太子よ、よき妃を得られたようだな」

その隣で満足そうに頷きほほ笑む王に、王太子たる彼は、静かに頭を下げていた。その左手が、そつと胸のあたりをさすっているようにみえたのは、見なかつたふりをして差し上げることにした。

最初の勝負は、こちらが頂きましたわ。

これからまだまだ勝負は続くでしょう。だけれども、負けるつもりなど、ほんのひとかけらすらもない姫なのだつた。

「お疲れ様でした。今日はゆっくりと休まれてください」

「あら、もうお戻りになりますの？ お茶でもいかがですか？」

姫にとつてはとても有意義な晚餐を終え、王太子に伴われるままに戻った、私室にて、そういうて引き揚げようとする王太子に、姫はそう声をかける。と、同時に、傍仕えの侍女が素晴らしい手つきでお茶を用意し始めるのをみて、彼は諦めたようにため息をつき、その言葉に頷いた。それを見届け、席に腰を下ろした姫は、僅かに眉を顰めてこるよつにすら見える王太子に、優しくほほ笑んだ。

「あなたを支えます、と、申し上げたでしょ」

彼は小さく首を振り、解せないとこりよつに姫を見つめる。

「それは、何故、なのです？」

「申し上げた通り……では、納得いきませんか？」

「こきません。あの言葉通りにしては、あなたの眼は強すぎぬ」

くすり、と、姫はほほ笑む。私は確かに、ひとつのかけには勝ったようだ、と。思った以上に、旦那様となる人は、優秀で、優しいようだから。多少、気遣いが強すぎて、心に負担がかかっているようではあるけれど、それもまた、美点と言えば美点でしょう。

「そうですね……では、一つだけ」

差し出されたいい香りのするお茶を楽しみながら、姫は一度目を伏せ、そして視線を彼にあわせる。

「あなたとならば、とても生きていこゝのが樂しいと思つたから、と、申し上げておきますわ」

自然と浮かぶ笑みは、いつも浮かべるほほ笑みではなく。艶やかで強かで、そして悪戯めいた笑顔だった。

しばし、じつとこちらを見つめていた王太子が、やがて、深く深く、長いため息を漏らす。

「素晴らしい妃を迎えた、とこつべきか、どんな方も迎えた、とこつべきか 」

その、何とも苦渋に溢れた言葉に、姫は、軽やかに声を上げて笑う。

「恼まれることなど、ありませんわ。私は貴方の妃となり、あなたは私をめとられる。それが唯一で、それ以上でもないのですから。そう、わたくしはあなたのものとなりますのよ？」

そつと声を潜めて、旦那様、と、呼んで見せれば、今まで取り繕つた表情が嘘のよう、ひるたえはじめる彼に、姫はそれは楽しそうに笑う。

そう、わたくしはあなたのもの。そして、あなたはわたくしのもの。

さてはて、狙われた子羊の未来やいかに、などと、内心戯れながらも、姫は楽しげに笑い続けるのだった。

狼さんは、さて、どうち？

「よき方を娶られましたな」

重畠重畠とほほ笑みながら頷く老人どもの姿に、顔が引きつる。執務室でいつものように執務を取るひと時、決裁事項を携えて現れるものどもが皆、似たような言葉を吐くのだけれど、その表情は千差万別、どこか苦みを隠すもの好奇心旺盛なもの、そして、この老人どものように満足げでどこか楽しげなもの、さまざまだった。一番たちが悪いのはこやつらだらうと、つぐづくわが身の不幸を嘆く。否、あの姫を娶ること自体を不幸とは思わない。最良の条件であるには間違いないのだが、どうにもこじこじも、思惑やら色々やらが垣間見えて、心安くない。許されるのならば、もつと野の花のような優しい女性がいないものか。まあ、そのような女性がいたところで、王の後宮の女狐たちにとつて食われるのがオチなのだが。

姫がこの国に訪れてより半月、日々の執務に追われながらの正式な婚姻の儀式は、さまざまもうるの事情を鑑み、残りひと月となっていた。本来王族の婚儀であれば半年やら一年やらをかけるのもおかしくないことなのではあるが、警護を任せられた子飼いの騎士いく、もつと早くしていただいてもいいくらいです、とのこと。子飼いとなつている者たちはとても優秀で、忠義に厚い。時折向けられるまなざしがどこか同情のように見えるのは気のせいだと思つ、気のせいにしておく。忠義ではなく同情で仕えられているとなつてしまえば、なんだかいろいろ自信喪失して立ち直れなさそうである。そして、姫との関係は、といえば、日々食事を共にし、時折庭園などを伴い歩き、稀に晚餐に出席しながら双方がそれぞれに、婚儀の準備に追われていた。そのなかで、彼は、理性では最良と理解しながらも、胃の痛みと憂鬱さが蓄積されるのを悟らずにはいられない

田々を送っていた。

あれからも、姫と女狐たちの勝負は、田々続いている。

姫とは、田々の晩餐を共にして、執務の合間にお茶の時間や庭園への散歩など、とまざまな場で時間を作つては会つようにしてゐる。日々護衛の騎士たちのやつれしていく様に、一度は会つのを控えようかと進言したが、どちらにしてもかわらないからと、力なく答えられてはそれ以上何も言えない。王に進言するも分かつたと頷くばかりでこれと言つて手じたえもなく、晩餐の際は徹底しているからかそういうものの、茶会の折り、さらには庭園などをそぞろ歩きしていれば、まだまだ色々と弁えぬ者たちの差し金で、いろいろと襲撃は絶えない。やすがに隣国の姫を娶るといつてのままではどうだろうかと、こうこうと手をつくすのだが、こちらには芳しい報告は上がつてこない。

しかし、この姫は、やすがといつが強かといつか　　豪胆な姫であることに違はないだろう。襲撃の際、おびえた様子で傍げにこちらに頼る様は、守らねばと庇護欲をそそる風情でありながら、ひとつび周りの眼がなくなると、がらりと空気が変わる。姫自身も國から差し向けられたごくわずかな護衛のほかに、何やら一方ならぬ空気を漂わせる影を持つてゐるらしく　　その中に以前彼を狙つた刺客がいたことにはおどろいたが　　彼らの働きもはつきりと視覚はできないがめざましいものであるとは報告を受けていた。姫は、ひつそりと傍付きの侍女と言葉を交わし、何やら彼女なりに手を打つてゐる様子で、その詳細が気になりはするが、こちらに害をなさぬとこう確約はとれていることと、彼女の強かさに、胃が痛い思いを

させられながらもどこか惹かれている自身も自覚して、彼は、見守るだけの状況であった。

「どうにかしなければならない、だけれども、上手く事が進まない。けれど時は、執務は待ってくれず、焦燥と憂鬱の中で両方の天秤を揺らされながら、彼はキリキリと痛む胃をさすりながら、日々を送っていた。

「なにも心配なことはありませんわ。私は負けるつもりはないと、何度も申し上げておりますとおり。すべてうまくいかせてみせますから、心安らかにお過いじくださいませ」

お茶の時間、どこか顔色の悪い彼に対し、姫はそうほほ笑む。その言葉通り、今までの晚餐や夜会にて、他の側妃やその親族からかけられる嫌味の言葉にも仕掛けにも、彼女はひとつたりともひっかりはしなかった。それどころか、時には憐れに涙を浮かべてみせ、嫌味を仕掛けた相手を見事に悪役へと仕立て返して見せた事すらあつた。確かに、彼女の言つ通り、負ける勝負をするつもりはないのだろう。彼女のそなはかなげで柔らかにみえる美貌つらはらに、彼女はしつかりとこちらの国の状況や貴族たちの状況を調べ上げており、その持つ知識で鮮やかに行動してみせた。

その頭脳と、美貌と、かの国での寵愛具合を考えるに、何故この国に、何故わが身にと、嬉しいと思うよりも先に、恐れが先立つのは、何故なのだろうか。

相変わらずの憂鬱さと、振り回されるその環境に、思わず壁に向かってため息をつけば、ずっと機嫌のいいままの側近が、呆れたように告げる。

「何がそんなに不満なのです。あれほどの方を娶られるところに

「

その言葉に、ぶちん、と、糸が切れた。

「不満？ 不満などないさ、ああ、これっぽっちも不満などあるものか。ただ、ただ、あの時、家出できればこんな思いなどすることなかったのにとか、狐と狸の大戦争かよフザケンナとか思つていやしないさ。ああそっさ、知つてるか、狸つてのは姫のことじゃないぞ、今まで気づかなかつた俺が馬鹿なのか、愚かなのか、それとも親だからと盲信しすぎていたのかはわからないがな、あのくそ親父、見事な狸じやねえか。知つてるぞ、お前も一枚かんでやがるだろう。あの姫が来てから、どうも親父と接触してやがるようだとおもつたら、案の定、だ。フザケンナ、俺が頑張つてきたもんをなんだと思ってやがる。あーあー、どうせ役にたたねえ間抜けな王太子ですよ、ダメ王太子ですよ、だから家出してやるつつてんだろーがよ。全くどいつもこいつも、俺は決められたことを繰り返すのは得意だがそれ以上はきびしいんだつーの。親父殿が昔しつかり整備したこの国の大盤があるからなんとかまわせてることくらい、それはさすがに気づいてたつーの。なのになんだってんだよ、まったく、まったくよ……」

壁に向かって一気に咳けば、側近の顔が引きつるのが目の端に映る。しつたことか、人前では王太子らしく振舞つているのだからこのくらい許しやがれと内心咳けば、くすくすと軽やかな笑い声が、執務室の入り口の方から響く。

振り返れば姫がいた。

……なにしてるんですかほんとうに。

「我が姫さまには、かなりお疲れの」様子。お茶でも」一緒にいかがですか？」

あれだけの醜態を田の当たりにしながら、楽しげにほほ笑みそう誘つてくる姫に、どにか愕然とする。促されるままに席に着き、進められるがままにかぐわしい香の茶を口にすれば、いくらか心がほぐれる気がした。

「わが君さまは、頑張つておられます。頑張りすぎて少しばかりお疲れのですわ。しかし、今しばりく、踏ん張つてくださいませ。きつけりと、すべてに白黒、カタつけでござりますから」

姫の口から出した言葉に、思わず田を瞬く。その彼の様子に気づいたか、姫は楽しげに、それはそれは楽しげにほほ笑んだ。

「すべてが片付きましたら、わたくしが、とてもとても楽しことをたくさん、教えて差し上げますわ。そう、だから、もう少し、もう少しだけ、乗り切りましょう」

そういうて差し伸べられる手に、無意識のうちに手が伸びる。そつとそのまま引かれ、隣り合つたソファに座つていた体が傾き、姫の膝の上に頭を乗せる形となる。

「……っ、これは」

「大丈夫です。人払いをして」といいますから。ですから、今は少しだけ、おやすみくださいませ。ちゃんと起こして差し上げますから。少しだけお休みになつて、そうしてもう一度、踏ん張つてくださいませ。きっと、きっと、楽にしておしあげますから」

ゆるりと彼女の細く白い手が、彼の髪を梳くように撫でつける。ゆるりゆるりと繰り返されるその手つきに、長いこと不眠気味であった彼は、次第にとろりとろりと眠りに誘われてゆく。柔らかなその頭の下の感触が、姫からかおるその香が、その細い手の暖かさが、気にならないわけではなかつたが、それよりも、もたらされる穏やかな眠りが、すべてに勝つていた。

「おやすみなさいませ、わが君。ひと時の安らぎを、美しきひとときの眠りを。 いざれそれを、穏やかで普遍な日常にするために」

穏やかな声音に誘われるまま、彼は静かに眠りへと落ちていった。

結論から言つてしまおつ。

彼女との婚姻は、間違いなく、彼にとつて幸いであつただろう。こののち、婚儀までに繰り返された襲撃は次第に減つてゆく。そして、婚儀を間近に控えたある日、王と側妃、そして貴族たちの控える前で、姫はその証拠を証言者と共に差し出したのだ。王はその進言を受け入れ、第三妃以下のものをその罪状により幽閉もしくは蟄居とし、また、その身内も財産没収などの処罰を与えられた。第一・第二妃に関しては、姫と初めに対面した時より何やら行動を潜めており、全くその動向がつかめていなかつたのだが、のちに、その婚儀の前の大処罰の件で王と会話した彼は、すべての真実を知ることとなる。 つまりは、王が狸であつた、ということなのだが。

第一、第二妃は、確かに権勢への愛着がなかつたわけではないが、それでもどうやら王を愛していたらしく 初めの姫との対面の際に、姫への手出しの危険性を悟つた彼女たちに、王が直々にそれぞれ声をかけたことと、行動を改める方向となつたようだ。 そんなことができるのならば、最初からやつてほしかつた、と、思つて

しまつのは間違いではないだらう。それが表情に出ていた彼に対し、王は食えない笑いでこう答えた。 そなたが王太子にふさわしくなれば、そうしたであらうよ、と。

そうして、彼は、姫を娶る。盛大な婚儀ののち、彼は静かに問い合わせた。

「なぜ、私を選んだのですか」と。

彼女は、それはそれはあでやかに、幸せそうにほほ笑みながら、楽しげに答えたそうだ。

「何よりも勝ち目が多く、それに、どなたより誠実そうでいらっしゃつたから、ですわ」

さて、このお話、このあたりでおしまいにしたいと思つ。 彼と彼女がそれからどうなつたのか、少しだけお話するならば、そう、かの王国では、その後、即位した新たな王は堅実さで知られ、またその側には美しく優しい王妃がよりそつていたとのこと。

そして、その国の下町では、時折、それはそれは美しく艶やかな美女と、どこか自信なさげな美貌の青年のコンビが、共に楽しそうに過ごしている姿が見られるようになつたとか。

これは、とある国とのあるお話。少しばかりノイローゼだった王子様と、とっても賭け事が大好きなお姫様の、そんな一人の秘密のお話。

ノイローゼだった王子様は、少しばかりふりまわされて胃が痛む日々を送りつつも、日々穏やかに眠れる夜を、手に入れたのでした。

f  
i  
n

## 除夜の鐘が聞こえる

クリスマスイブに彼氏ができた。  
クリスマスにプロポーズされた。

嬉しいな、つておもうんだけど、でも、でも。

少しだけ唐突すぎませんか？せんぱい。

仕事にも慣れてきはじめて、ちょっと余裕ができたころ、ちょうどみんな同じように思つたのか連絡が回つてきた。久しぶりにみんなで同窓会行こうよ！と、高校時代の友達からの連絡に、それもいつかな、なんて、そのくらいの気持ちで参加を決めた。

同窓会に参加するのは、実は卒業以来だつたりするから、たまのメールとか、暑中見舞いとか年賀状とかで連絡はとりあつてたけど、会うのは超久しぶり、つてひとがたくさんで、結構たのしかつた。なかでも、図書館組、と、当時呼ばれていた図書館入りびたりグループのメンバーは、それこそ、当時からある意味破天荒さで有名だった先輩と、その相棒な先輩が参加してて、超もりあがつていた。私も、嬉しかつた。高校時代のあの時、数名で入り浸つた図書館の、あの先輩後輩の入り混じつた不思議な雰囲気そのままで、楽しく過ごせたから。少しだけ悲しい思い出もある高校時代だけれど、だけど、それを払しょくするほどの想い出と、さらにいうならば、それ以上に強烈な想い出を残してくれた先輩がいたから。

二人並んでお酒片手に語り合う先輩たちを眺めて、その片方、相棒と言われてた先輩の方を見つめてしまう。覚えてますか？わ

すれてしましましたか？ 私は、あなたに助けられたんです。隣に座る友達ときやつときやと話しながらも、意識は先輩に向かってて。気が付けばばかり、と、余う視線。そして 気が付けば、先輩と連絡先を交換していく、そりに言えばちよくちよくと呼び出されるよになつたのが、クリスマスのひと月ほど前。

今思えば、再会から2か月とちよつと。

少しくらい不安に思つても、おかしくなこと、思いませんか？

「大晦日。出かけるよ」

「つ、せんぱーいつ。出かけよつ、じゃなくて、出かけるよ、つて、るよ、つて、なんで確定ですか」

クリスマスのあと、照れくさいながらもまあ、恋人としてデートしよつね、みたいな雰囲気になつて、年末の仕事納めのあと、飲みに行こうと誘われた居酒屋で。まあ、うん、先輩セレクトのお店は、ご飯がおいしいので、そこは最高なのです。というかせんぱい、食道楽の傾向アリアリです。このお店、山芋鉄板がおいしそう。

じゃなくつて！

「……ダメ？」

首を傾げないでください。そろそろいい年のかせしてなんでそんなに、あなたの仕草はかわいいんですかー！ と内心で叫びつつ、首

を振る。予定はない。一応一人暮らしだし、実家帰省予定もないし。

……[元旦]一日から仕事だからね！世の中世知辛いよね！でも年末30日から元旦まで休みあるだけましょね！と、脱線しつつ、

ふう、とため息。

「大丈夫です、ですけども。もうまづもう、せんぱいって、どこのいくんですか？」

「ひみつ」

人差し指を唇に当てて、嬉しそうに笑った。　ああ、もう、いつも負けっぱなしです、私。

そしてその日はお泊りなしで（そつそつしょっぴゅうお泊りなんて、いろいろ私が持ちませんから！）帰宅して。大晦日つて明後日じゃん！とか、とりあえず明日大掃除して、と、予定を組みつつ、今できる片付けからー、なんて手を付ければ、ピるピるピール。うん、私のメール着信音、ピるピるなんだ。みると、せんぱいから。『あさつて、ぬくいかつ』うで。20時じる、迎えいく

……なんということでしょう、年越しですか、年越しですね。といふことは、荷物も作らないと。ああ、少しは洋服もちょっとちゃんとしたやつを、っていうか、ええ、何を用意したらいいのー？！と軽くパニックになりつつ、支度を少しずつ整えて、片付けをして、迎えた大晦日。

田中は片付けの残りをして、夕方までかけてなんとかピカピカに磨き上げた部屋で、やつと新年を迎える気分になつて、それから、それから、ほこりっぽいまじやダメだよね、と、急いでシャワーを

浴びて、それなりの格好をして、ああでも、新しい服買えればよかつたかなあ、でも、うう、結婚するならお金ためておきたいし、と、そこまでかんがえて、ぱたりと、手が止まつて。

けつこさん、ほんとうに、するのかな。

プロポーズはされたけど、指輪ももらつたけど、せんぱいのことだいすきだけど。急展開すぎたからかな、どこがまだ信じきれない自分が、いて。一度頭を振つて、とりあえず気合い入れて着替えて、指輪を付けて。それから、荷物を用意してたら、玄関のチャイム。むかえにきたせんぱいに、変な顔みせたくないから、笑顔全開で、扉を開けた。

ふつうのつもりだつたそれが、せんぱいにはいろいろばればれだつた、なんて。

ネタバレされるまで気づかなかつた私は、別に鈍くない、と、いいたい。たぶん。

「じゃ、こいつか

手を差し出される。当たり前のように当然のようひきあひやでひきあひやになつたのは、いつからだろ。そして、それをあたつまえのようひに握り返せるようになつたのは、ぎゅ、と握り返せば伝わる温もり。自分の手より大きな、手。なんだかほつとするような切なくなるような、この気持ちが、嬉しくて、少し切ない。

手をひかれるまま、ゆつくりと歩いて家から近い繁華街へ。割と仕事場にも繁華街にも歩いていける距離にある我が家、せんぱいの部屋もそう遠くない。ふらりふらりと歩きながら、ついたのはお蕎麦

「ほんま。せんぱこをみれば、うん、と頷く。

「ほんま。先にんじま。」

つれられるままに入ったお蕎麦屋さんは、少し寂れてるよつに見えただけど、お蕎麦さんは結構して。あつたかじHビののつたお蕎麦をおいしくいただいて、ほつじつぬくもつたといひで、またせんぱいに連れられて出発。

「せんぱこ、えいじこくの？」

時間は、22時。お蕎麦屋さんで少しお酒をいただいて、ゆつくりしてたからこんな時間。ちらりと時計を見た先輩は、うーん、と考えるやつついで、少し早いかなあとこいつ、私の手を引いて歩いていく。

「えいじこくんだら、と、思いながらも、手をひかれてこると不安ではないことに気づく。「うん、せんぱいだもんね、ふりまわされてもしかたないかんじだよね。でも、うん。」こうして握られた手の温もりと、共に歩くスピードがゆつじつな」とを考えると、なんだか、彼に大切にされている、ところはすくく感じられるから。不安に思つことなとて、なによね、なんて、歩きながら考えてたら。

「ついた」

皿を上げると、口の辺では割と大きなお寺さんだった。

「お寺さん？」

「あい。」

手をひかれるまま進めば、受付、じゃないけれど、丁寧みたいのがあって。どうぞーって差し出されたのは、キャラメルとミカン。……キャラメルとミカン？ と首を傾げると、いいからいいから、つて先輩が先を促す。そのままつれられていけば、見えるのは大きな鐘と、そこに向かって並んでる人たち。

「あ……除夜の鐘」

「ん。」、「鐘付かせてくれる。場所によつては、女性NGとかあるナビ、」、「はフリー。あ、お酒もうれるナビ、」、「」

首を振つてこたえつつ、貰つたミカンを両手で包む。ん？ とよくみると、カイロもあつたからそれをありがたく使わせてもらひ。

「ちよつとまだ早いから、あつたかいの、貰おひ」

そうつこつてせんぱいは、お茶を貰つてきてくれて、ふうふうしながら一人で、飲んで。 そしたら。

「あのね。本気だからね」

「……はい？」

唐突すぎて、思わず聞き返す。

「年明けたら、実家にこえ様拶こへか。都合聞いておこで

「あ、え？ はい？」

ふう、と、どこか緊張したようにため息をついた先輩は、じりりと向くじと視線を合わせてきた。

「急だつたから、不安だつたんでしょ。泣きそつな顔してた」

断じてそんな顔を見せた覚えはないのだけれど、もしかすると扉を開けた時にこわばつた顔をみられてそつおもわれたのかもしれない。小さく苦笑する。

「なきませんよ。不安だつたのは、~~否定~~しないですけれど、でも」

「うん。一人で泣かせないから。泣くときは、僕がいるところで。決定。だから、ずっとそばにいてもらひ。だから、早くご挨拶して、早く結婚しよ！」

「つて、ええええつ、せんぱい、ちよ」

「……いや？」

だから首かしげないでください……つ。いやなわけじゃない、いやなわけがない。あの時、高校の教室で、泣いてる私をみつけてくれたときから、いえ、その前から、ずっとずっと心の中でせんぱいを慕い続けていた。会えなくなつても、どこかで慕い続けてきた。だから、ちょっとだけ、こんな急展開で、夢みたいな展開があつていの？！ つて不安なだけで。

「いや、じゃないですよつ。もつもつもつ、はああ……しかたない、か。せんぱいだもんね」

くすくす、と笑いがこぼれる。と、『ローン、と大きな鐘の音が響き

始めた。煩悩の数だけ響く鐘の音。並んでいたから、割と早い段階で、順番がきて。先輩が先で、私があと。鳴らして、まだ次々と響く鐘の音の中、ふう、と深呼吸。

ま、いつか。こんな人だつてわかつて、唐突な人だとしつついて、慕い続けたのは自分。それに、彼は振り回す人だけど、いい加減ではない。誠実な人。だから、きっと、大丈夫。

「せんぱい」

くいくい、と、袖を引いて、少し屈んだ先輩の耳に、内緒話。

一瞬、驚いたように目を見張った先輩は、次の瞬間には、蕩けるようになんと、笑ってくれた。

やがて、鐘の音が、静かに静かに響き渡り、やがて最後の鐘を、お寺の方が鳴らして。気が付けば、周囲で始まるカウントダウン。

一緒になつて、せんぱいと、大きな声をあげて。

「あけまして、おめでとう」

「今年も、いいえ、これからずっとよろしくお願ひします」

二人で顔を見合させて、そつと笑った。

高校の時から、ずっと、ずっと、慕つてたつて、知つてましたか？

今年も、来年も、そしてその先も。

振り回したり振り回されたり。

そんな風に、彼と過ごせたらいい、と、懸空の下、彼に寄り添いながら、そう思ったのだった。

fin

## お嫁式おじ式（おまか）

「……っ、せんぱいっ、卑怯です……っ」

涙目で彼女がいつから。少しだけ困つて、首を傾げた。

「やう？」

「やう、やうですともー。なんで、なんで、なんでえええー。」

やっこ、と、悔しげな彼女に、そっとお椀をすすめる。

「うう、こに香り……おこしあつなお雑煮ですね。九州風ですかそ  
うですか」

しくしく、と、文字が見えそうな彼女の様子に、ダメ？ と問いか  
ければ。

「ダメじゃないですともー。私がダメなだけですうううう

うわああん、と、机に突つ伏した。

テーブルの上には、重箱に収められたおせち料理。今年は年末休み  
ががつつとれて、妙に暇だったので、作ってみたのだが。

「おこしくない？」

「うへ、おこしこでや……今度作り方おしえてくださこ……」

「うまい、味は彼女のお気に入りしたようだけれど、彼女にショックを『たらしこ』

まいする」とじゃないのになあ、と、思いつつ、これ幸いと、よしよじと頭を撫でておいた。りつやーである。

除夜の鐘のあと、彼女を連れてそのまま近くの神社で初もつでし。2年参りにはならなかつたけれどまあ、それは来年も再来年もあるし、と、思いつつ、一緒に初日の出をみにいくのもわるくないなあ、などと思いながら、今日のところは、と、彼女を自宅へお持ち帰りして。一緒に眠つて目覚めた朝、まだうとうとしてる彼女をそのままに、雑煮を仕込んでいたことに、においにつられた彼女がやつてきて、そして、セツティングされたテーブルを見て、そして冒頭に戻る。

まああと宥めて、新年のあこいつをして、お屠蘇をいただいて。吸い物仕立てのお雑煮を渡せば、ほつこり幸せそうな顔で、食べ始めてくれた。うむ、この「」飯を食べるときの顔があるから、余計に幸せなのかもしない。などと、崩れまくつてているだらうでれでれ顔で眺めていれば、顔をあげた彼女が、ものすつこじ真剣な顔でこちらをみていて。

「せんぱー……」

「ん? うした」

「むしろせんぱいが、お嫁にきてください。私養いますからー。」

握りこぶしでそんなことをいう彼女に、思わず声を上げて笑ってしまう。

「もうもうもう、じょうだんじやないのにーっ」

「うんうん、悪かった。悪かった。嫁にもらってくれるなんらようこんで？」

よしよし、と、頭を撫でて、椅子から立ち上がってちょっとお行儀悪いな、って思いながらも、テーブル越しにおでこにキス。真っ赤になつた彼女になんとなく満足して、自分の作った料理をいただく。うむ、悪くない。

「……ほんっと、せんぱい、ずるいんだからもおおお

拗ねたような口調だけれど、そう呟いた彼女の顔が、ゆるりと幸せそうだったから。

いつか、そう、これから先。毎年こうして共に過ごすのだと。いつかは、二人が三人になるのだと。ああ、子供もつれて鐘をつきにいこう。初日の出も見に行こう。それに、そうだ、初もうでにもいつて、初売りにもいこう。あれもこれも、と、考えると、楽しくて、きっとそれを叶えるんだと思うと、嬉しくて幸せで。ゆるりと緩んだ表情で、彼女に告げた。

「大好きだからね。早く結婚しようね」

赤い顔のままの彼女は、ちらり、と、食べていたお椀から視線を上げて、仕方がないなあ、という風に、ほほ笑んで、頷いてくれた。

幸せな、新年の始まりの日の、お話を。

fin.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0356z/>

---

Training Box

2011年12月31日22時52分発行